

奈良県感染症発生動向調査事業報告

平成 27 年 内科・小児科感染症の概要

1. 平成 27 年の流行状況

<全国>RS ウイルス感染症・手足口病・A 群溶連菌咽頭炎・伝染性紅斑が流行した。RS ウイルス感染症は平成 18 年に統計をとりだしてから年々増加傾向にあり、平成 24 年からは定点当り 30 を超え、今年には 38.13 と最多であった。手足口病も今年も定点当り 121.33 で、平成 23 年の流行時 110.91 を上まわった。平成 25 年は 96.54 であり、1 年おきに流行していた。A 群溶連菌咽頭炎は今年も定点当り 127.54 で、平成 26 年の 96.77 を上まわり、過去 10 年では最も多い報告数であった。伝染性紅斑も多発していた。今年も定点当り 31.31 で、過去 10 年では平成 19 年に 26.95、平成 23 年に 27.77 と多い時期があり、4 年に 1 度の流行を見るようである。その他の疾病には流行は見られなかった。

<奈良県>全国的に流行した疾病のうち全国平均を上まわり流行したのは、RS ウイルス感染症と手足口病であった。RS ウイルス感染症は平成 24 年に定点当り 20.91 であったのが漸次増加しはじめ、平成 25 年は 26.94、平成 26 年は 29.74 となり、今年には最も多い 53.38 で、全国 13 位に多い県となった。また手足口病は全国と同様平成 23 年の流行時 69.83 を大きく上まわり、今年には 125.71 と全国平均の 121.33 より多く、全国で 24 番目にランクされた。A 群溶連菌咽頭炎は平成 18 年に定点当り 54.91 であったが、平成 26 年より増加しはじめ、平成 26 年には 52.56、今年には 81.94 と過去最多の報告があった。しかし、全国的には 37 番目で、全国平均を下まわった。伝染性紅斑は今年も全国的に多発していたが、奈良県では平成 19 年の定点当り 29.17、平成 23 年の 26.26 より下まわり、15.56 と過去 10 年では 3 番目の流行となり、全国的には 38 番目になっていた。

2. 奈良県を中心とした近隣府県（三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、和歌山県）の状況

全国的に流行した RS ウイルス感染症と手足口病が近隣府県でも流行した。その他全国平均を上まわった疾病は、奈良県では見られなかったが、インフルエンザは三重県と滋賀県で、咽頭結膜熱は三重県、大阪府、兵庫県で、感染性胃腸炎は大阪府と兵庫県で、水痘は滋賀県、大阪府、兵庫県で、伝染性紅斑は滋賀県で、突発性発疹は三重県、大阪府で、百日咳は三重県、大阪府、兵庫県で、ヘルパンギーナは三重県、滋賀県、和歌山県で、それぞれ全国平均を上まわっていた。

3. 地区別・疾病別報告数の定点当りでの検討

報告数の多い疾病を地区別で見ると、北和地区はA群溶連菌咽頭炎、水痘、手足口病、伝染性紅斑、突発性発疹、百日咳、ヘルパンギーナであった。中和地区ではインフルエンザ、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱、感染性胃腸炎、手足口病であり、南和地区では流行性耳下腺炎が県内で多かった。

4. 年齢別報告数（10歳以上は1歳平均）と月別の発生状況

疾病別に年齢別の報告数と月別の発生状況を見ると、インフルエンザは4歳から8歳までの子供が各年代で400件以上の報告があり、1月の5451件をピークに4月まで発生が多かった。RSウイルス感染症は1歳児が604件と最多で、乳児期から3歳までがそれぞれ150件を超す報告があり、12月の686件をピークに9月から1月まで多くの発生を見た。咽頭結膜熱は1歳と2歳が100件を超す報告があり、月別では12月の90件をピークに4月から6月、10月から12月と2期にわたって各月々に50件以上の発生報告があった。A群溶連菌咽頭炎は5歳を中心に2歳から9歳までが多く、発生は6月の401件をピークに3月から7月、11月、12月に200件以上の報告があった。感染性胃腸炎は1歳児が1371件で最も多く、4歳までが各年代で600件を上まわっていた。月別では12月が1305件と最も多く、11月から6月にかけて月500件以上の報告がつづいた。水痘は3歳児が81件で最も多く、2歳から6歳までが50件以上の報告があった。月別では1月が70件で11月から4月にかけて50件以上の発生があった。手足口病は1歳が1277件で最多、4歳までそれぞれの年代で450件以上の報告があった。また月別では7月が2156件とピークで、6月から8月にかけて毎月約500件以上の報告があった。伝染性紅斑は4歳から8歳にかけて50件以上の報告があり、ピークは5歳の87件であった。月別では12月が116件、7月が68件で、6月、7月、10月から12月にかけて50件以上の発生が見られた。突発性発疹は乳幼児期の疾病であるので、7か月から12か月の乳児が87件、1歳児が377件と多く、時期は6月、7月、10月に80件以上の報告があった。百日咳は予防接種の影響があるのか未接種の乳児と免疫の弱くなった高学年学童に発生が見られた。6ヶ月までの乳児が3件、10歳から14歳までの学童が3件報告があった。報告月は4月と9月であった。ヘルパンギーナは1歳から3歳までの各年代で約100件以上の報告があり、1歳が173件で最も多かった。また7月が367件と多く8月には174件と100件以上の報告が見られた。流行性耳下腺炎は3歳から5歳に多く、いずれも50件を超していた。月別では10月から12月にかけて50件以上の報告があり、ピークは12月の95件であった。

(足立 豊彦 記)

インフルエンザ定点分
(小児科定点・内科定点)

1.インフルエンザ

図 1-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

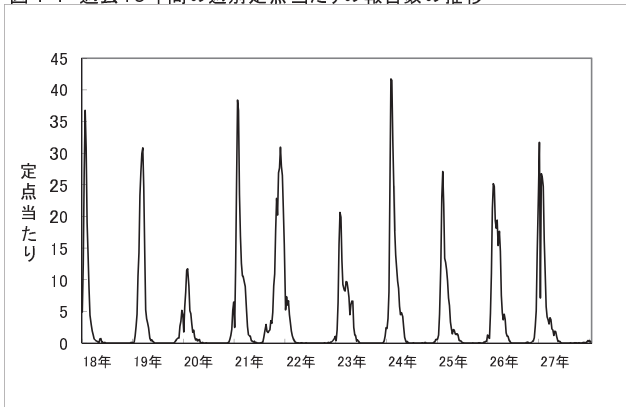


図 1-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

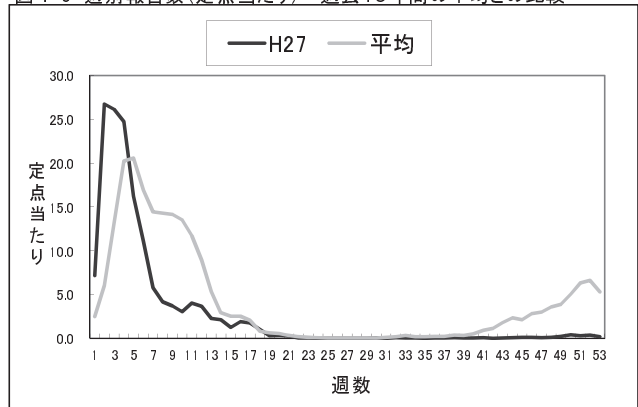


図 1-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

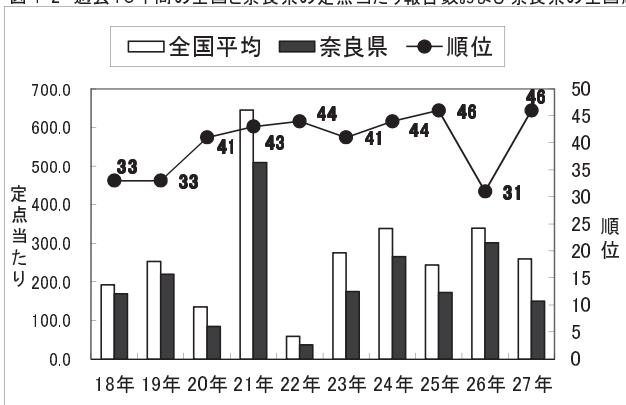


図 1-6 年齢別報告数(実数)

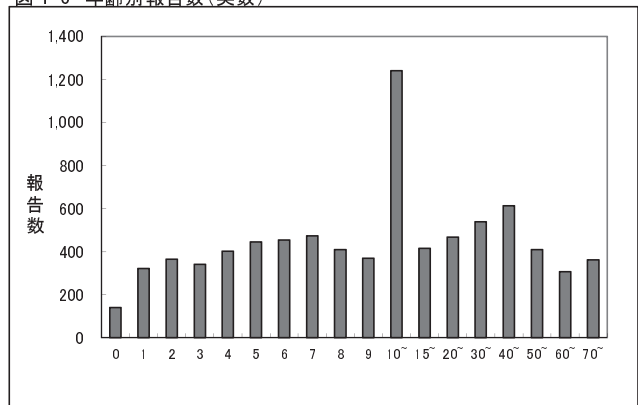


図 1-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

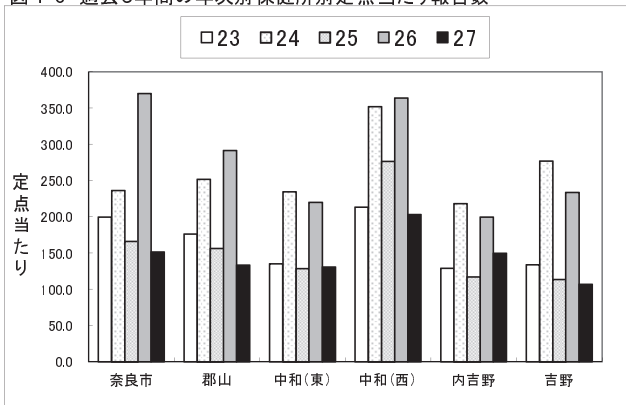
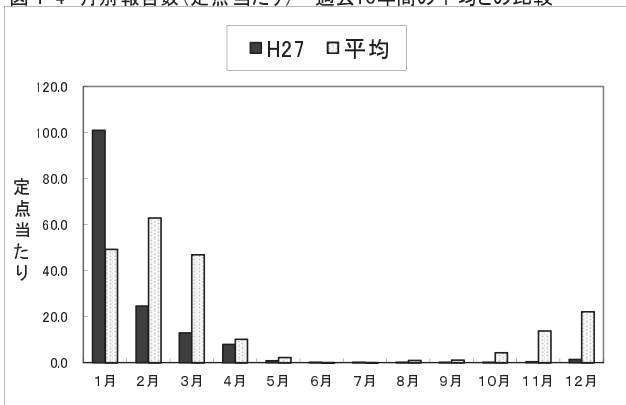


図 1-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



コメント

報告数は8,080例、定点あたり149.63であり、過去10年間では3番目に少ない年であった。都道府県別の定点あたりにおいても、全国46位と過去10年で最も低い順位であった。保健所別の定点当たりの報告数は、最多が中和(西)保健所の202.73、次いで奈良市保健所の151.27であった。流行の動向を月別に見ると、1月が100.94と最も高値で、2月24.69、3月12.91、4月7.98と終息し、週別に見ると例年よりもピークが3週間早かった。流行の型については、1月から2月にかけてAH3(香港型)が主流で、2月以降はB型(山形系統)が検出された。A香港型は2シーズンぶりの流行であり、B型はここ数年、山形系統のウイルスの検出が続いている。年齢別報告数では、7歳が474例と最多で、4～9歳の就学前後に多く分布した。

(山本 圭一 記)

小兒科定点分

2.RSウイルス感染症

図 2-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

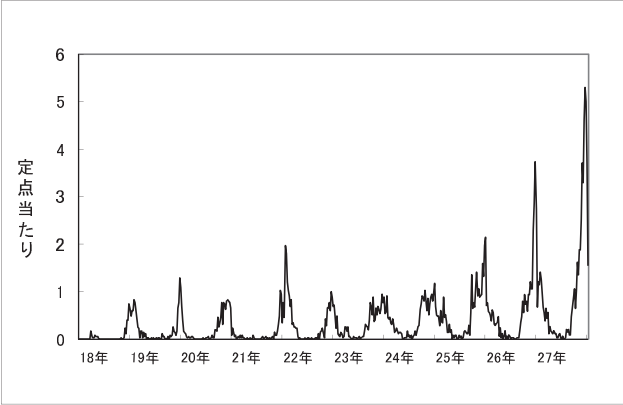


図 2-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

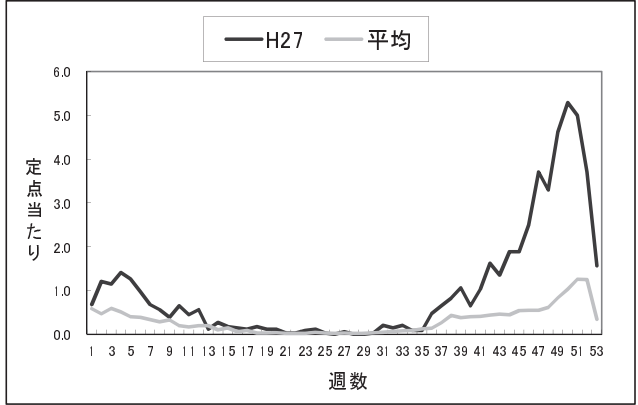


図 2-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

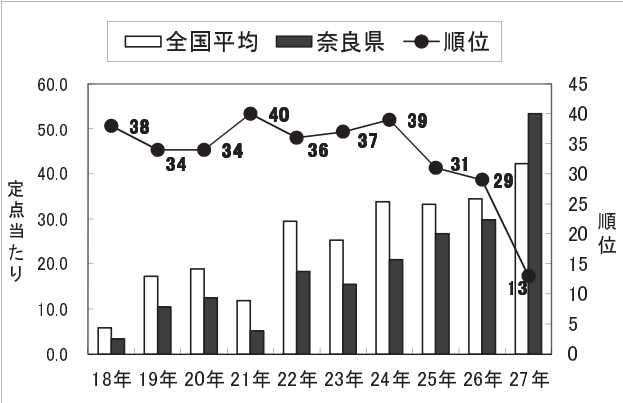


図 2-6 年齢別報告数(実数)

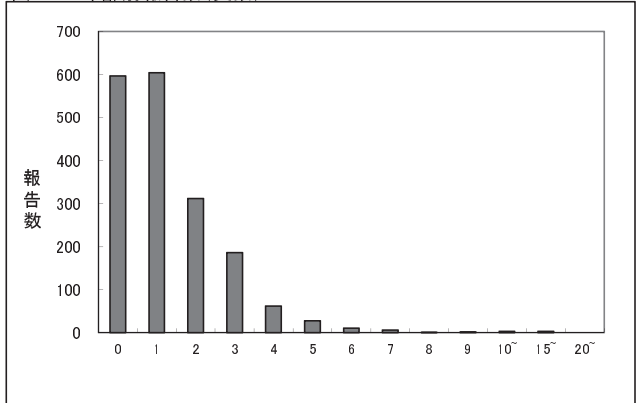


図 2-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

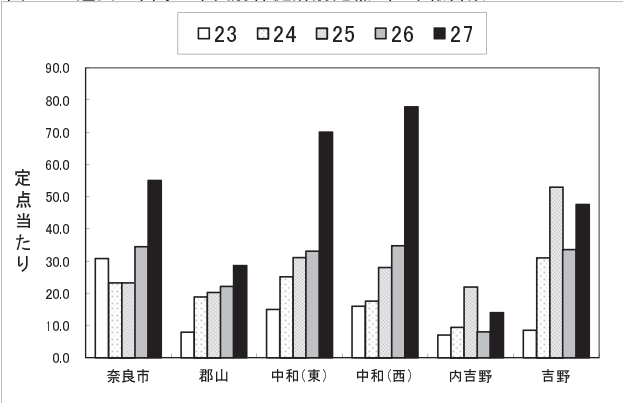
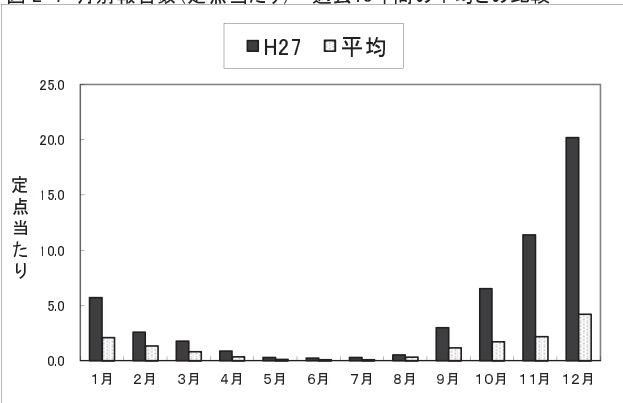


図 2-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



コメント

報告数は1,815例、定点あたり53.38であり、過去10年間で最も多く、平成23年より右肩上がりに増加している。都道府県別の定点あたりでも、全国13位と過去10年で最も高い順位であった。保健所別の定点あたりの報告数は、最多が中和(西)保健所の77.86、次いで中和(東)保健所の70.00であった。月別報告数では、8月第1週よりウイルスが検出され、流行開始時期が早くなる傾向にあり、12月をピークとして流行した。年齢別報告数では、0～5歳児が全体の98.6%を占め、その中でも0歳と1歳児が特に多かった。

(山本 圭一 記)

3.咽頭結膜熱

図 3-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

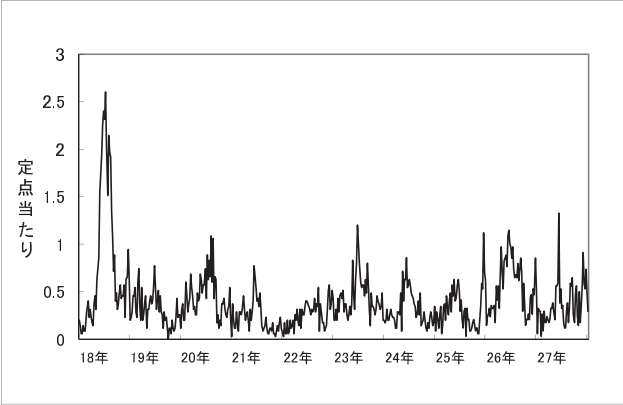


図 3-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

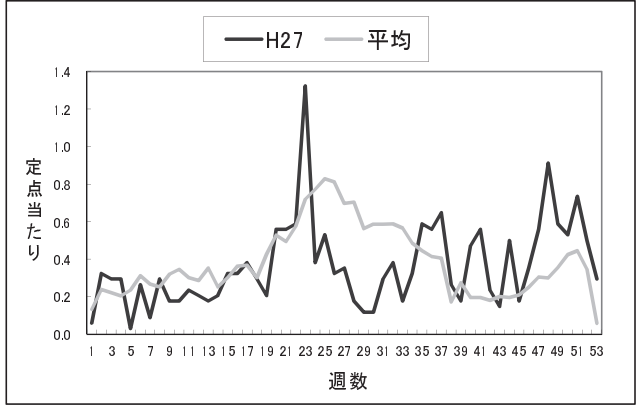


図 3-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

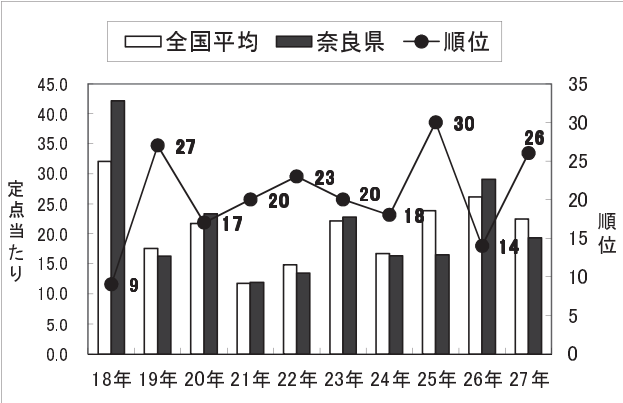


図 3-6 年齢別報告数(実数)

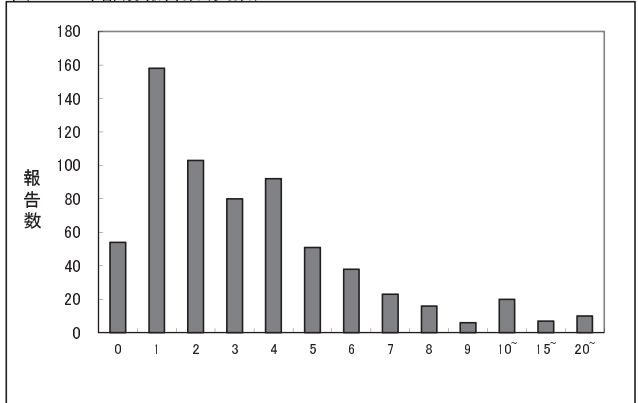
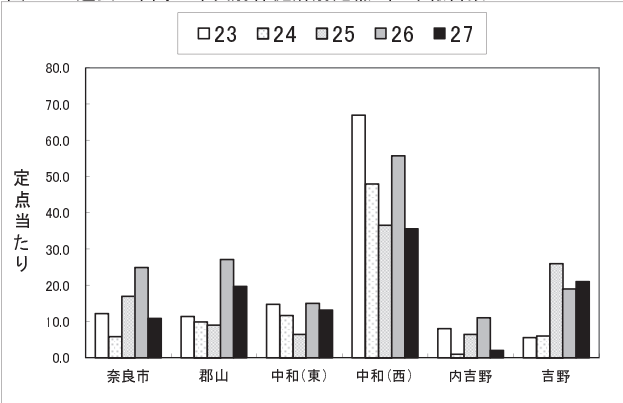


図 3-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

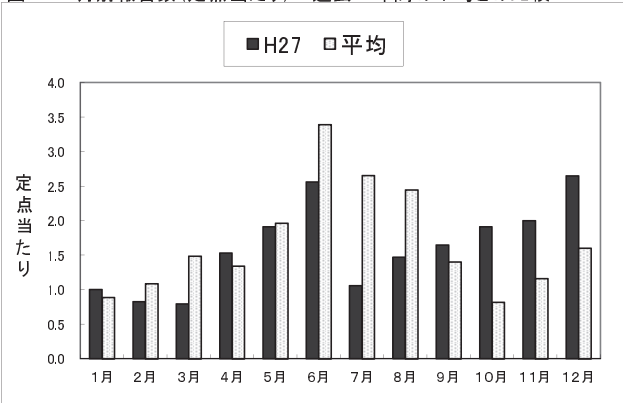


コメント

報告数は658例、定点あたり19.35であり、過去10年間では平成18年の定点あたり42.17をピークに、その他の年では10～30の間を推移している。都道府県別の定点あたりにおいても、平成18年が9位と全国平均を大きく上回ったが、その他の年は全国平均と同程度である。保健所別の定点あたりの報告数は、最多が中和(西)保健所の35.57、次いで吉野保健所の21.00であった。患者からの検体搬入は4例で、いずれもアデノウイルス(3型1例、4型3例)が検出された。患者報告は昨年同様、夏場及び12月に流行が見られ、ウイルスも同時期に検出された。年齢別報告数では、0～5歳児が全体の81.8%を占め、その中でも1歳児が特に多かった。

(山本 圭一 記)

図 3-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



4.A群溶連菌咽頭炎

図 4-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

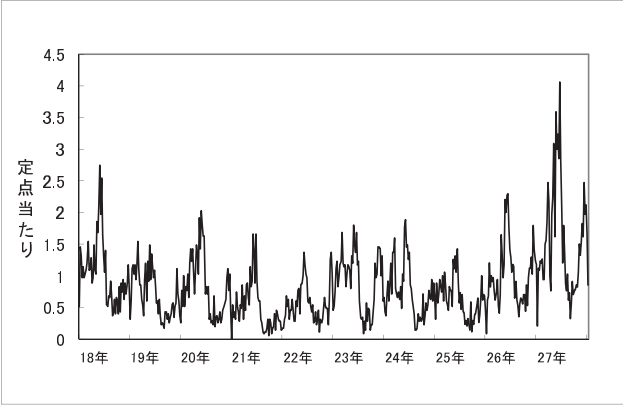


図 4-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

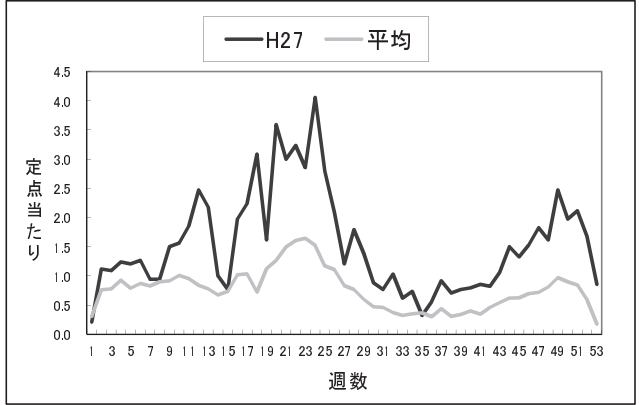


図 4-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

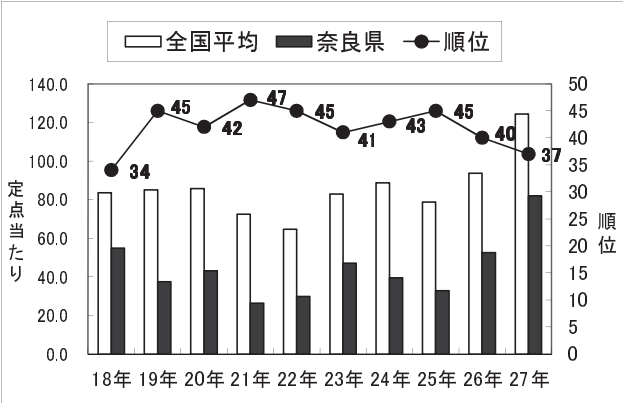


図 4-6 年齢別報告数(実数)

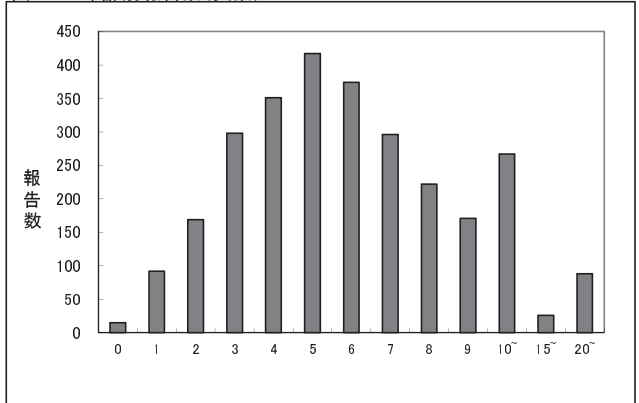


図 4-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

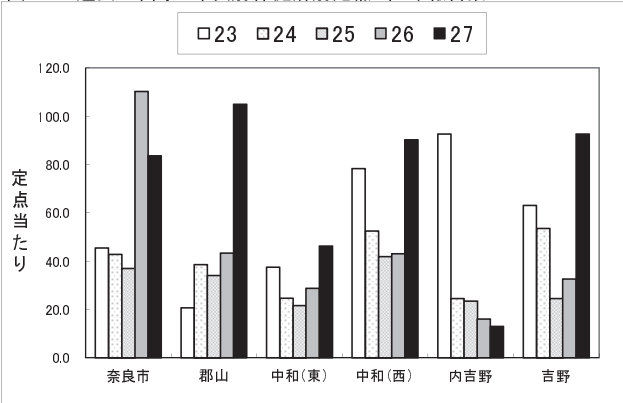
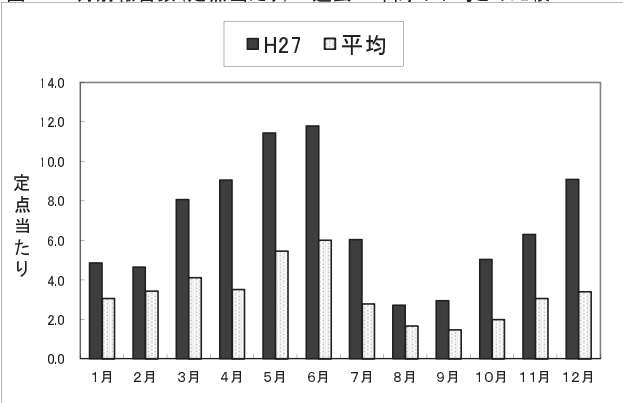


図 4-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



コメント

平成27年は、全国的に定点当たりの報告数は124.38と前年93.63に比べ増加。
 奈良県の報告者数は2786例、定点当たり81.94であり、前年52.56、前々年32.75と比較すると増加。過去10年間の定点当たりの報告数では、一番多かった。
 都道府県別の定点当たり報告数順位では、奈良県は41～47位で推移していたが、本年は37位であった。
 保健所別の定点あたりの報告数は、郡山保健所が104.90と全国値を下回ったものの最大で、次いで吉野保健所92.50、中和(西)保健所90.14であった。最少は、内吉野保健所の13.00。
 月別の定点当たりに報告数では、1～2月は4.85～4.65で推移していたが、3月には8.06と増加がみられ、5月は11.44、6月には11.79と最多であった。7月以降は減少し、8月には2.71となったが、12月には9.09まで増加した。
 年齢別の報告数は、3歳298例、4歳351例、最多は5歳417例で、6歳374例、7歳296例とこの年齢層をピークとする一峰性分布を示し、この年齢層で60%以上を占めた。

(白井 謙一 記)

5. 感染性胃腸炎

図 5-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

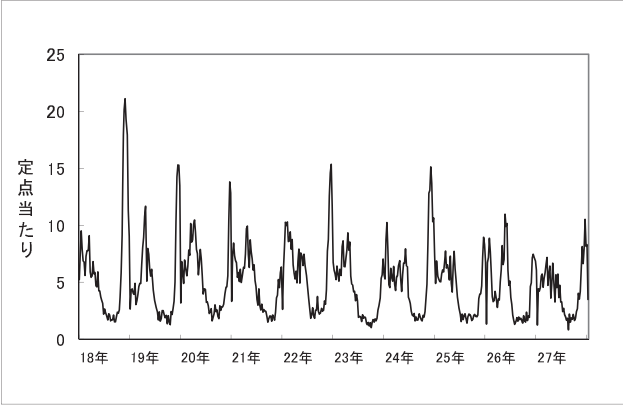


図 5-5 週別報告数(定点当たり)一過去10年間の平均との比較

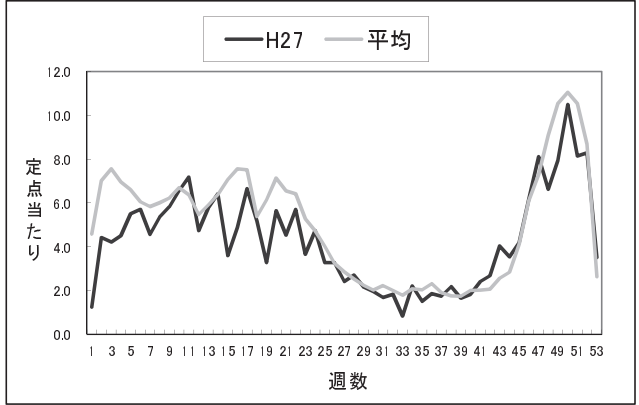


図 5-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

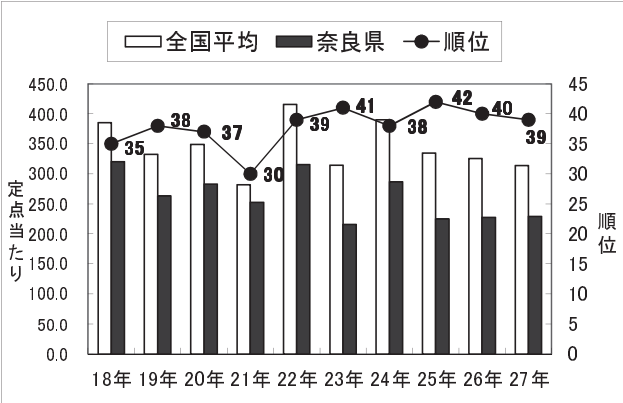


図 5-6 年齢別報告数(実数)

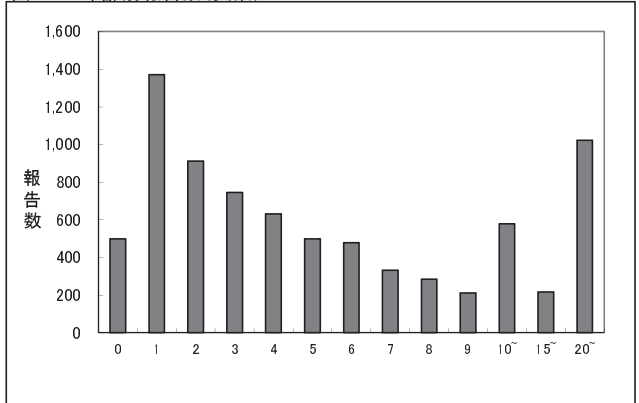
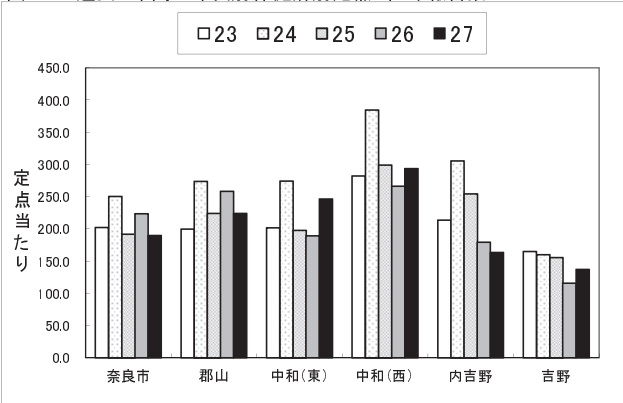


図 5-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数



コメント

報告数は、7781例、定点当たり228.85であり、前年の227.68と比べ、ほぼ増減はなかった。過去10年間の定点当たり報告数は300～200の間で推移している。

都道府県別の定点あたりの報告数では、奈良県は39位であった。

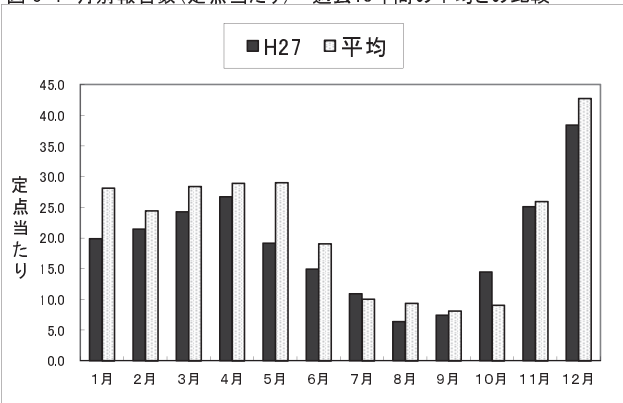
保健所別の定点当たりの報告数は、最多は中和(西)保健所の293.57、次いで中和(東)保健所の246.14で最少は吉野保健所の137.00であった。

月別の定点報告数は、1月～4月まで19.85～26.71と冬から春先まで流行期が続いた。6月には14.91と減少し、夏～秋期は1桁の報告であった。11月には25.06と増加し、12月の38.38が最多となった。

年齢別の報告数は、最多は1歳の1371例、次いで2歳の912例であり、乳幼児期で6割以上を占めた。

(白井 謙一 記)

図 5-4 月別報告数(定点当たり)一過去10年間の平均との比較



6.水痘

図 6-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

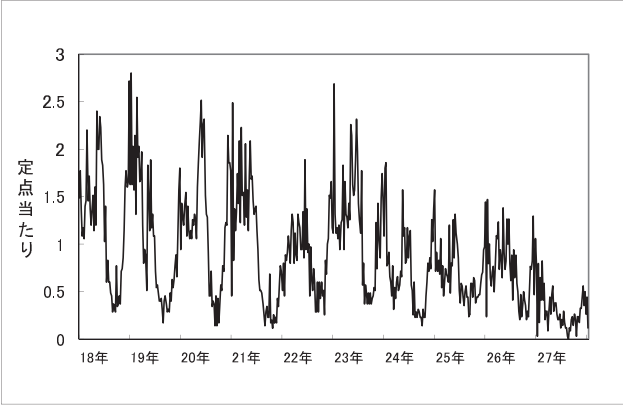


図 6-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

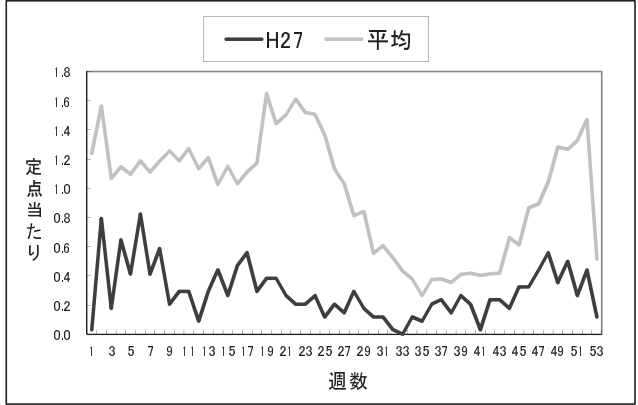


図 6-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

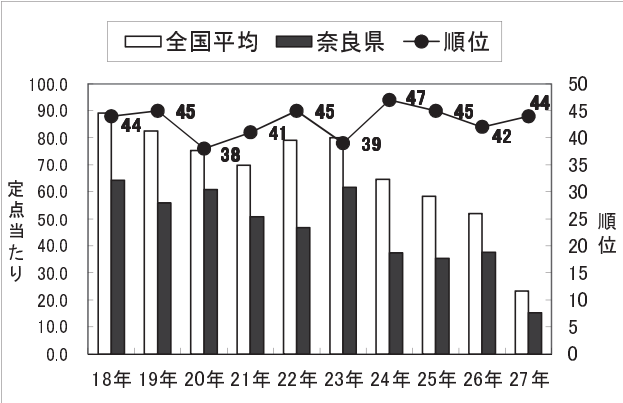


図 6-6 年齢別報告数(実数)

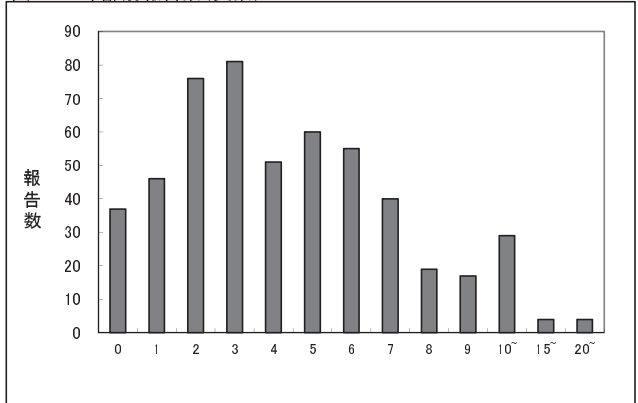
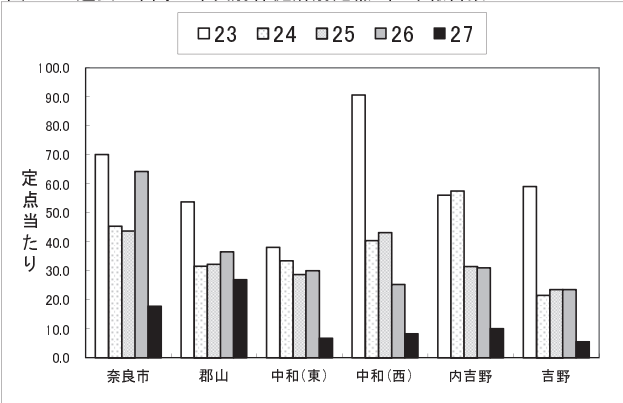


図 6-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数



コメント

報告数は、519例であった。過去10年間の定点あたりの報告数は、平成24年に37.40と減少し、以降は35.32～37.62で推移していたが、本年は15.26とさらに減少した。

都道府県別の定点当たりの報告数では、奈良県は44位であった。

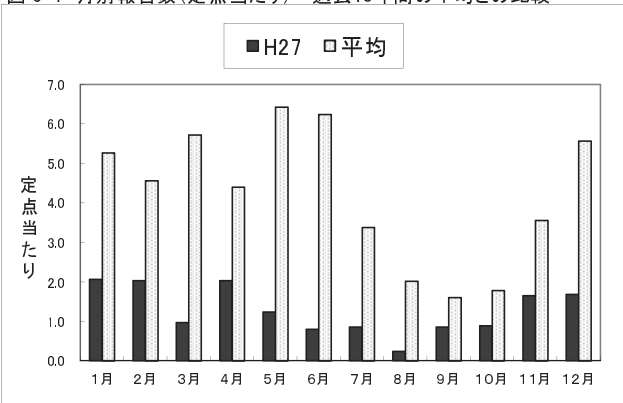
保健所別の定点当たりの報告数では、郡山保健所が26.90と全国値に比べても多いが、その他は、17.71～5.50で、最少は吉野保健所であった。

過去10年間の月別平均報告数をみると、冬～夏前にかけて報告が多く、4.39～6.42の幅広いピークとなっている。最多は5月の6.42、次いで6月も6.24と多いが、7月には3.37と減少し、11月までは1.60～3.56で推移している。冬期になり12月には5.57と増加に転じている。

年齢別の報告数では、最多は3歳の81例、次いで2歳76例、5歳60例と続き、6歳までの未就学児でほぼ8割を占めた。

(白井 謙一 記)

図 6-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



7.手足口病

図 7-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

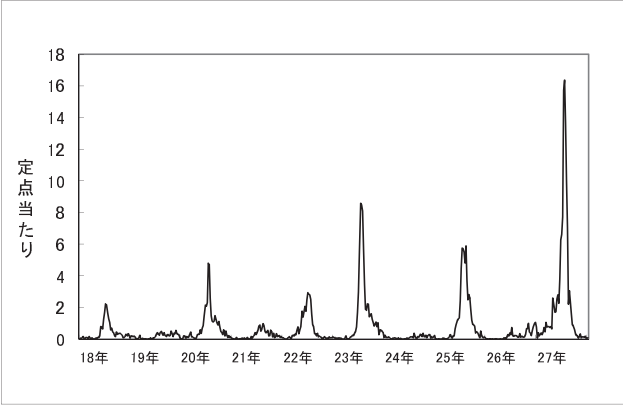


図 7-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

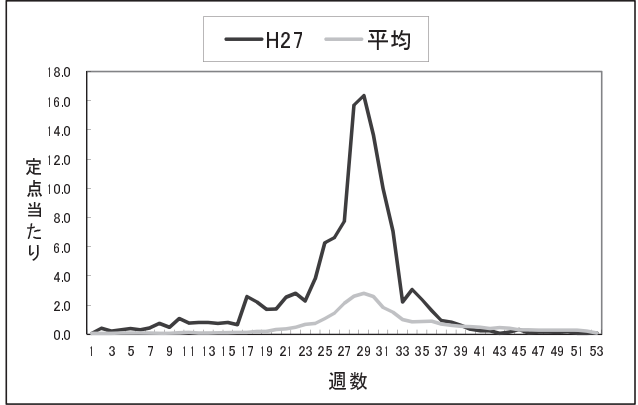


図 7-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

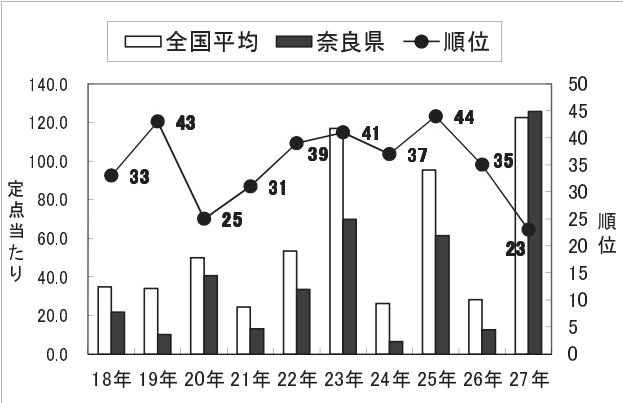


図 7-6 年齢別報告数(実数)

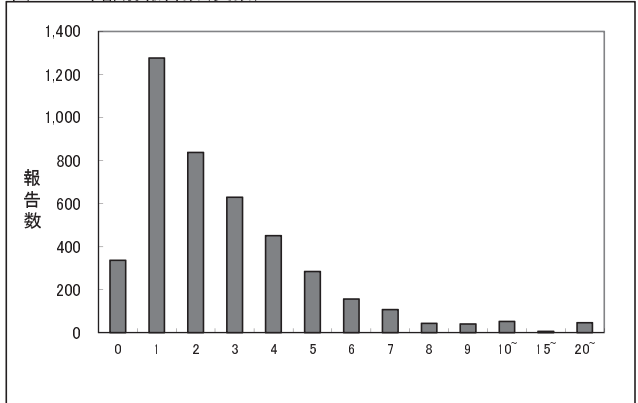


図 7-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

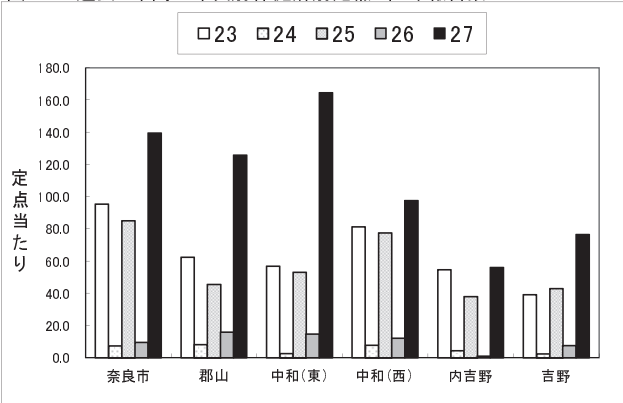
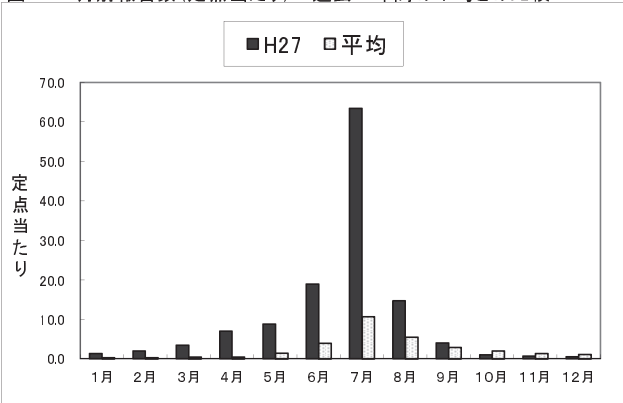


図 7-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



コメント

平成27年における全報告数は4,274例、定点当たりの報告数は125.71(全国平均:122.59)で、昨年と比較すると激増し全国平均を上回った。過去10年間の定点当たりの報告数をみると、ほぼ2年間隔の流行周期を認め、例年ほぼ30~40台で推移していたが(平成23年:69.83、25年:61.33を除く)、平成27年は、過去10年間で最高となった。都道府県別に定点当たりの報告数でみても、奈良県は全国順位23位だった。

保健所別に定点当たりの報告数をみると、例年と同様に突出して報告数が多い保健所は認めなかった。中和(東)保健所が164.43と最多で、奈良市保健所、郡山保健所が、順に139.43、125.60とほぼ同程度、次いで中和(西)保健所:97.43、吉野保健所:76.50と続き、内吉野保健所が56.00と最少だった。

月別・週別に定点当たりの過去10年間の平均報告数を見ると、例年は7月をピークに6月から9~10月に集中する一峰性分布をなしているが、平成27年では、初春頃(3~4月)から急激な増加を認め、ピーク時の7月(63.41)には、定点当たりの報告数は例年のほぼ6倍に達していた。10月に入ると、この大流行はほぼ終息し以降は例年通りの推移に落ち着いていた。第16週以降の増加は、特に第24週以降の増加が著しく、第39週以降は例年通りとなった。

年齢別での実報告数を見ると、0歳(337例)、1歳(1277例)、2歳(838例)3歳(630例)にほぼ集中しており、この年代で全体の70%強を占めていた。また、6歳までの小学校就学前の年代で、全体のほぼ90%強(3976例)を占めており、例年通り年齢分布に変わりはない。

平成27年における手足口病の流行は例年よりかなり早く、病原体定点からの提出検体で、6月初旬よりウイルスが検出された。平成26年の非流行期である冬場にコクサッキーウイルスA16型が検出されていたが、平成27年の初期の流行時も同ウイルスが主に検出された。その後、コクサッキーウイルスA6型が主流となり、7月終わりまで検出が続いた。コクサッキーA6型の流行は平成23年以降、2年おきに流行が認められた。

(村井 孝行 記)

8. 伝染性紅斑

図 8-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

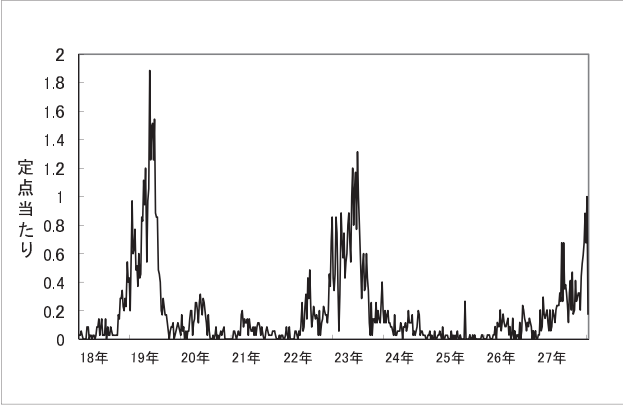


図 8-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

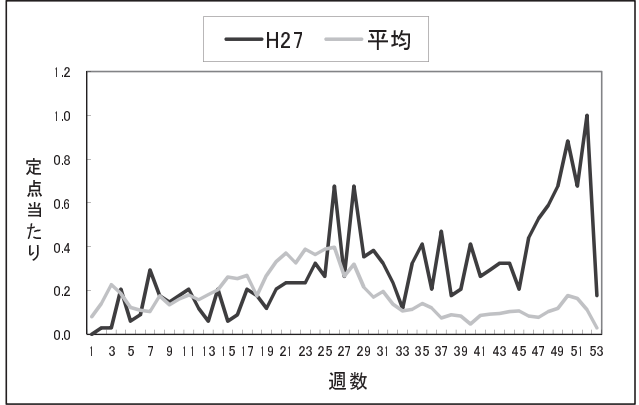


図 8-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

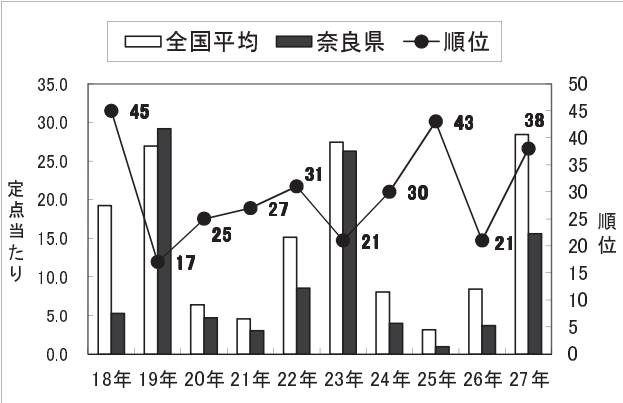


図 8-6 年齢別報告数(実数)

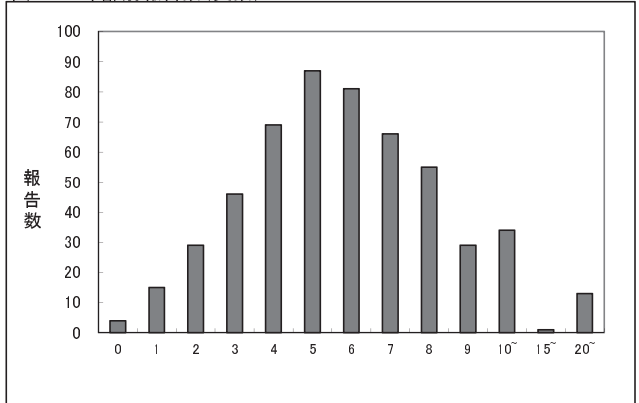


図 8-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

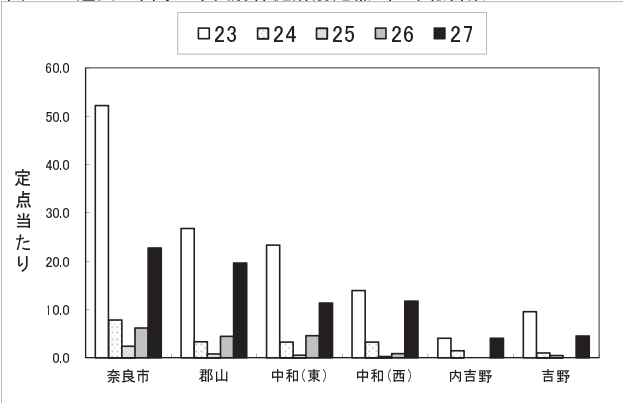
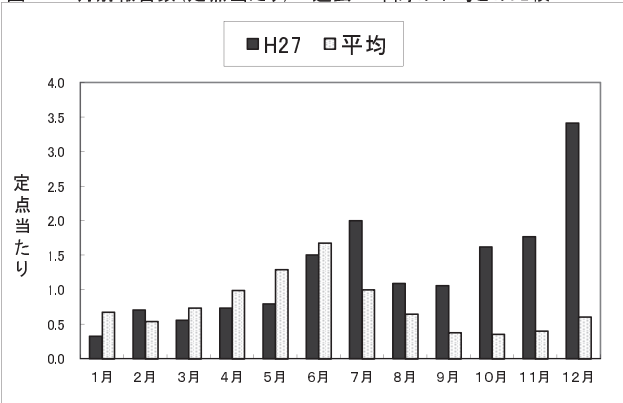


図 8-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



コメント

平成27年における全報告数は529例、定点当たりの報告数は15.56(全国平均:28.44)だった。過去10年間の定点当たりの報告数をみると、3~4年間隔の流行周期を認め、例年3.00~5.00の間を推移していたが(平成19年:29.17、平成23年:26.26を除く)、平成27年は、平成19年、平成23年に次いで3番目に多かった。しかし、都道府県別に定点当たりの報告数をみると、奈良県は全国順位38位にとどまっていた。

保健所別に定点当たりの報告数をみると、例年通り奈良市保健所:22.71と最多と変わらなかったが、郡山保健所は19.60と、奈良県全体としてみると例年より比較的多い傾向を認めた。次いで中和(西)保健所:11.71、中和(東)保健所:11.29が、ほぼ同数であった。吉野保健所:4.50、内吉野保健所:4.00だった。以上のように、平成27年は、北部>中部>南部と大きく三分された。

月別・週別に定点当たりの過去10年間の平均報告数をみると、その報告分布は、6月頃をピークとしたほぼ一峰性であったが、平成27年については、特異的な報告分布だった。例年9月以降は、報告数が減少し比較的小なかつたのに対し、平成27年は逆に増加し続けそのピークは12月に達していた。また、週数で見ると、第33週以降の報告数が増加し、さらに第45週以降の報告数の増加が著しく目立っていた。

年齢別での実報告数をみると、平成27年は過去10年間で3番目に全報告数が多かったためか、5歳(87例)をピークとして1歳~10歳までの年代に、幅広く一峰性の分布が認められた。また、7歳以上の小学校就学以降の年代においても、184例(34.8%)報告されていた。

病原体定点から提出された伝染性紅斑疑いの検体は5例あり、パルボウイルスB19とアデノウイルス3型を検出した。そのうち1例は重複感染事例で9月及び12月にウイルスが検出された。

伝染性紅斑は、主としてヒトパルボウイルスB19(HPV-B19)による感染症で、このHPV-B19は、赤血球の前段階の赤芽球前駆細胞に感染し破壊することがわかっている。妊婦が初感染で胎児までが感染すると、胎児の赤血球は減少し重症胎児貧血による胎児水腫で死産に至ることがある。また、流産、子宮内胎児発育遅延の原因にもなる。このため、子育て中の妊婦は、特に家庭内感染に注意しなければならない。

(村井 孝行 記)

9. 突発性発しん

図 9-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

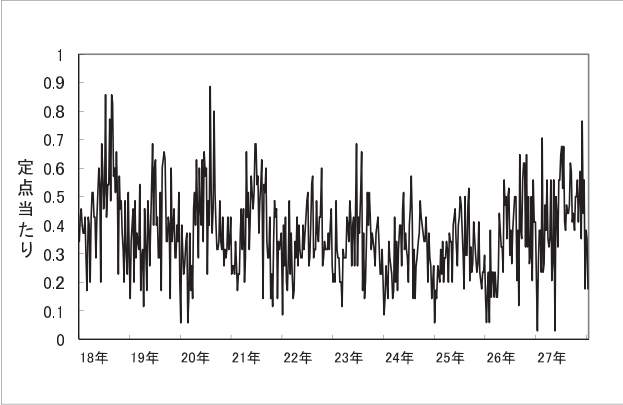


図 9-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

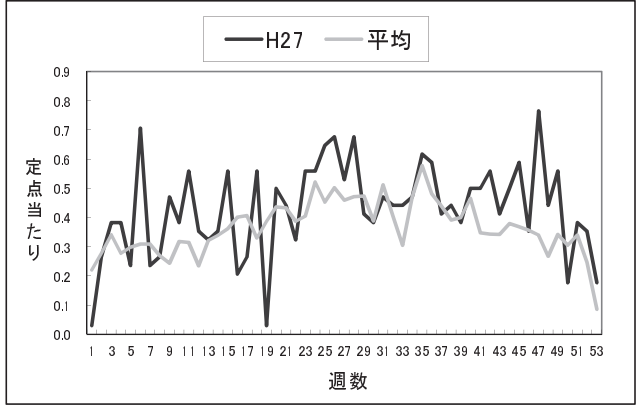


図 9-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

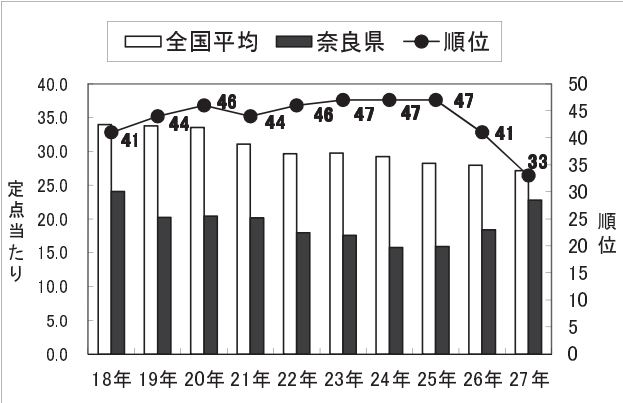


図 9-6 年齢別報告数(実数)

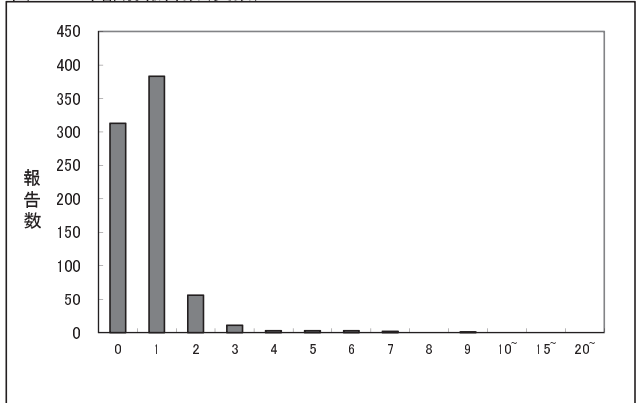


図 9-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

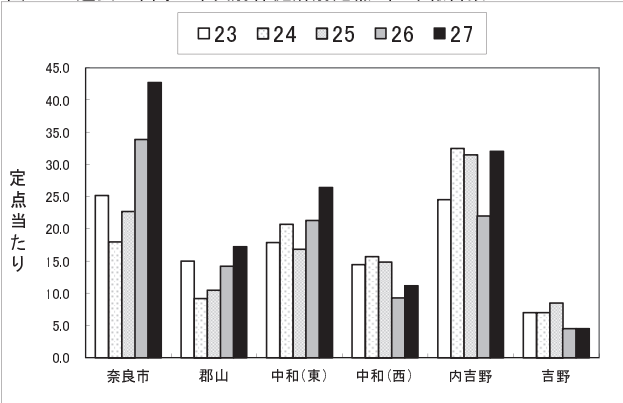
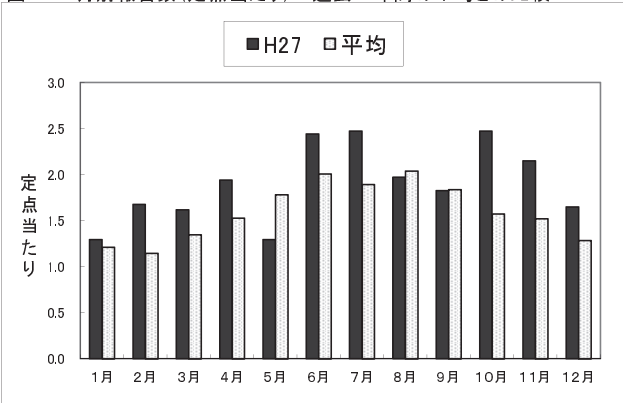


図 9-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



コメント

平成27年における全報告数は775例、定点当たりの報告数は22.79(全国平均:27.16)だった。過去10年間の定点当たりの報告数で見ると、全国的に平成18年以降をみると、右肩下がりになだらかな減少傾向が認められているのに対して、奈良県においてはここ2年連続増加傾向にあった。このため、都道府県別に定点当たりの報告数をみると、全国順位33位と過去10年間で最低の順位だった。

保健所別に定点当たりの報告数をみると、例年通りの傾向が認められ、奈良市保健所が、42.71と最多で突出しており、両者の順位が入れ替わっていたが、内吉野保健所が32.00、中和(東)保健所が26.43と続いていた。次いで、郡山保健所が17.20、中和(西)保健所が11.14と続き、吉野保健所が4.50と最少だった。

月別・週別に定点当たりの過去10年間の平均報告数を見ると、例年は梅雨時期の6月から夏場～初秋にかけての7～9月をピークとした一峰性分布だったのに対し、平成27年は、逆にピーク時の9月以降に再度増加し、10月以降は減少に転じたものの、その報告数はピーク時とほぼ変わらなかった。また、週数で見ると、例年なら減少傾向を認める第40～50週にかけて増加していたことが目立っていた。

年齢別での実数報告数を見ると、0歳(313例)と1歳(383例)でほぼ全体の90%弱を占めており、2歳で56例の報告はあるものの以降の年代では、ほぼ散発な報告であった。

突発性発しんは、主にヒトヘルペスウイルス6、7(HHV-6、HHV-7)やエンテロウイルスを原因ウイルスとする感染症である。また、母体からの移行HHV-7抗体は、HHV-6抗体よりも長期間持続するといわれており、そのためHHV-6による突発性発しんに遅れて、HHV-7による2度目の突発性発しんとして臨床上経験されることが多いことも報告されている。

(村井 孝行 記)

10.百日咳

図 10-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

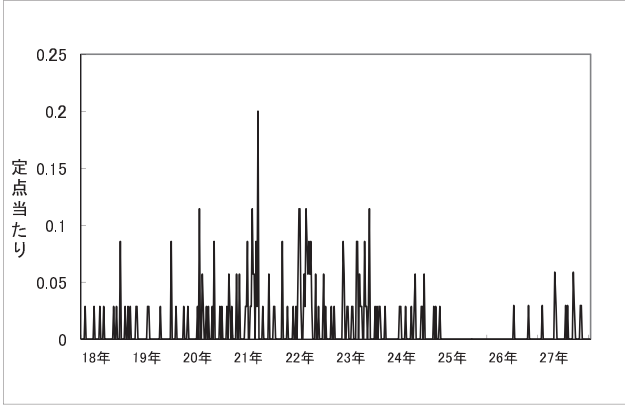


図 10-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

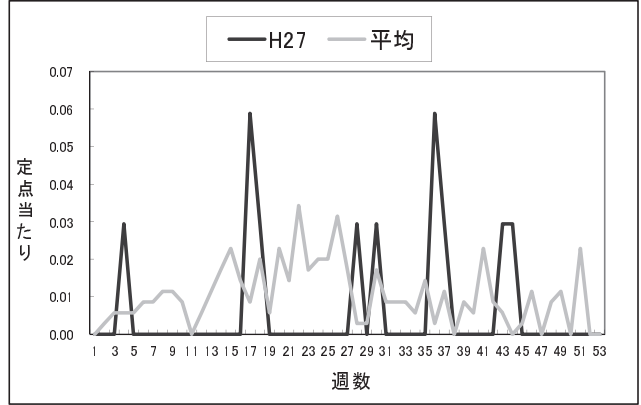


図 10-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

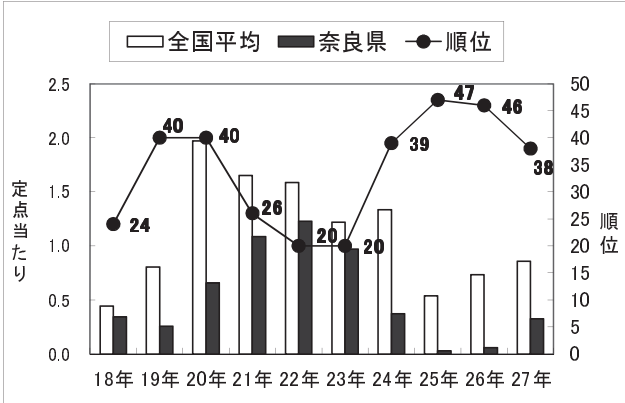


図 10-6 年齢別報告数(実数)

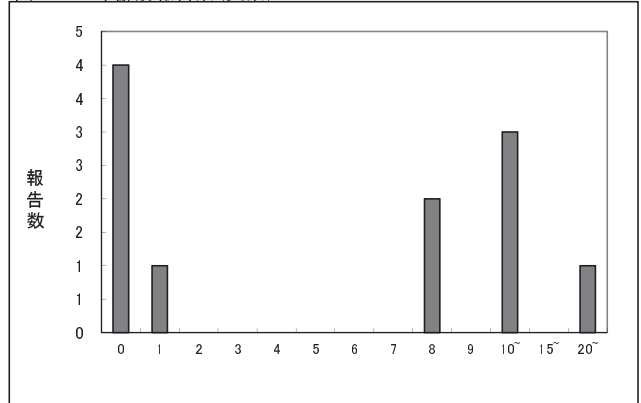


図 10-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

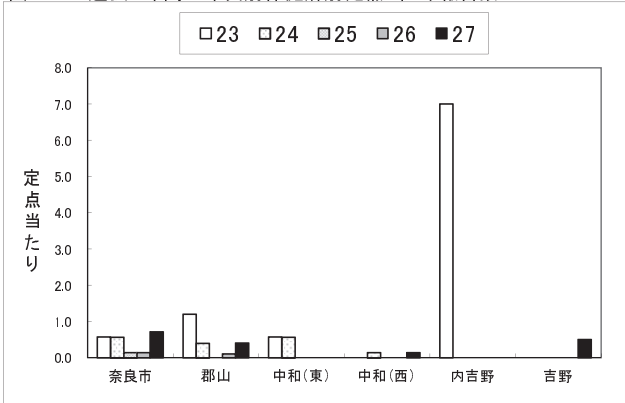
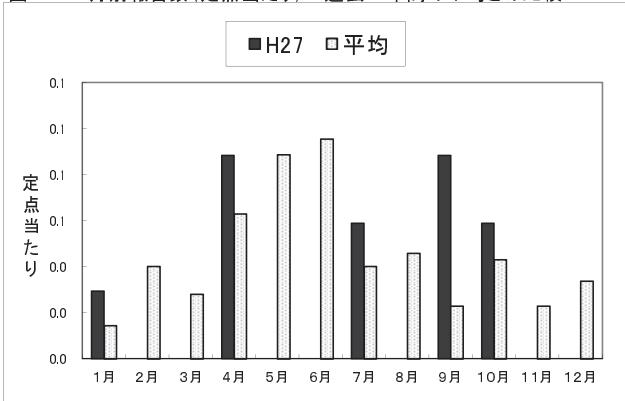


図 10-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



コメント

H27の奈良県の報告数は11人(定点当たり0.32)であった。

過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移(図10-1)は、H27の最多の週は第17週、第36週の0.06(2人)で、H25-H26年を上回りH24年水準に回帰した。

過去10年間の全国と奈良県の定点当たりの報告数および奈良県の全国順位(図10-2)は、直近の3年間は全国がH25(0.54)、H26(0.73)、H27(0.86)、奈良県がH25(0.03)(47位)、H26(0.06)(46位)、H27(0.32)(38位)で、全国、奈良県共にH25より2年連続の増加であった。

過去5年間の年次別保健所別定点当たりの報告数(図10-3)は、H27は①奈良市(0.71)、②吉野(0.50)、③郡山(0.40)、④中和(西)(0.14)、⑤中和(東)(0.00)＝⑤内吉野(0.00)の順であった。また、同一保健所内での推移では、中和(東)が3年連続報告なし、内吉野が4年連続報告なしであった。逆に、ここ4年間報告の無かった吉野がH27に報告ありとなった。

月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較(図10-4)は、最多の月が10年平均は6月(0.10)、H27は4月、9月の0.09であった。

週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較(図10-5)は、最多の週が10年平均は第22週、第26週の0.03、H27は第17週、第36週の0.06(2人)であった。

年齢別報告数(実数)(図10-6)は、0歳(4人)、1歳(1人)、8歳(2人)であった。年齢階級別報告数は10-14歳(3人)、20-29歳(1人)であった。

(柳生 善彦 記)

11.ヘルパンギーナ

図 11-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

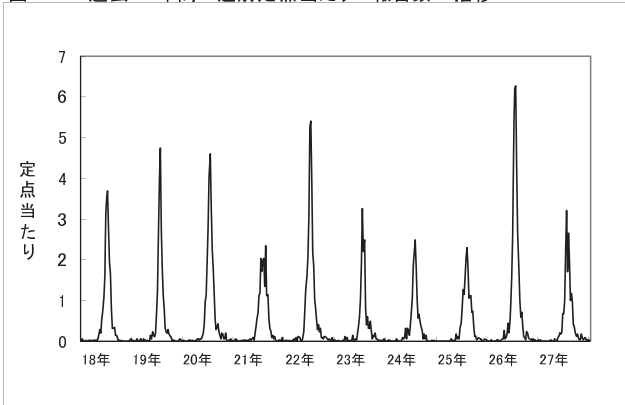


図 11-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

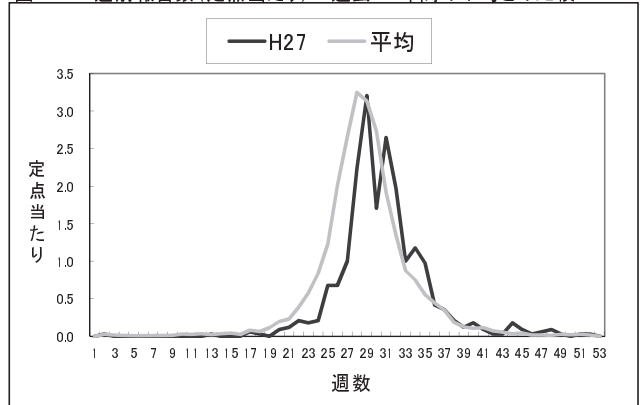


図 11-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

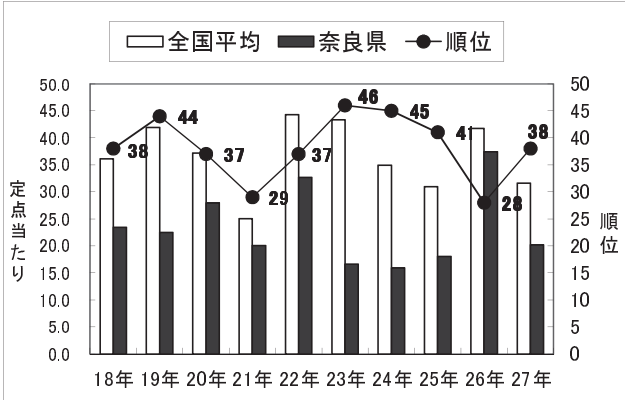


図 11-6 年齢別報告数(実数)

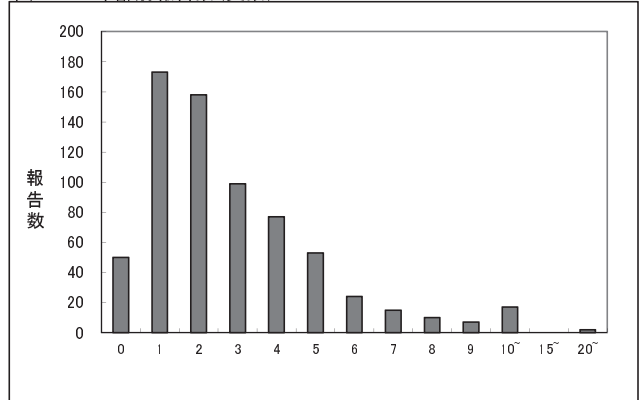


図 11-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

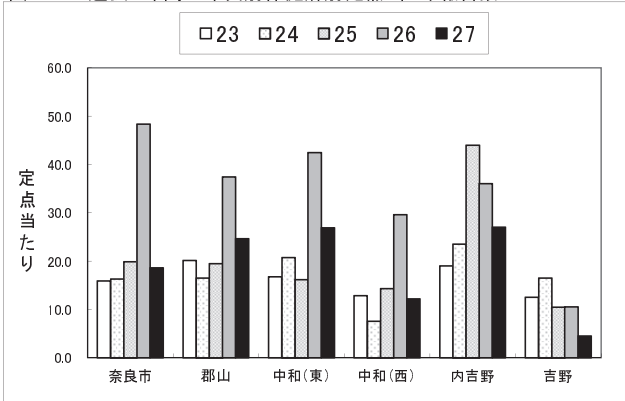
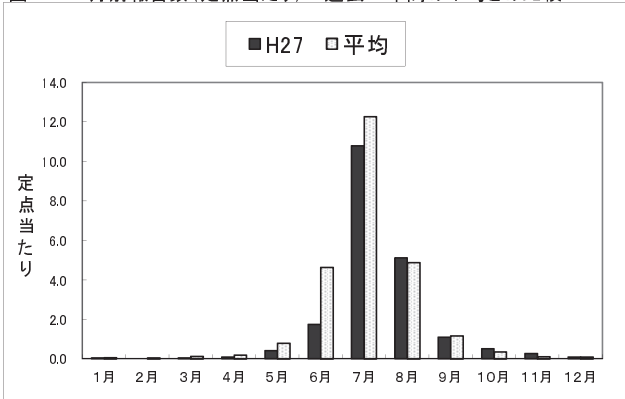


図 11-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



コメント

H27の奈良県の報告数は685人(定点当たり20.15)であった。過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移(図11-1)は、例年、年間最多報告数がほぼ一峰性のピークとして明瞭に顕れている。その値(=ピーク値)が最も高かったのはH26第29週(6.26)(213人)で、一方、最も低かったのはH25第31週(2.29)(78人)であった。H27のピーク値は第29週(3.21)(109人)であった。過去10年間の全国と奈良県の定点当たりの報告数および奈良県の全国順位(図11-2)は、H26が全国(41.76)、奈良県(37.44)(28位)で、奈良県は過去9年間での最多であったが、H27は全国(31.61)、奈良県(20.15)(38位)と、共に減少に転じた。

過去5年間の年次別保健所別定点当たりの報告数(図11-3)は、H27は①内吉野(27.00)、②中和(東)(26.86)、③郡山(24.60)、④奈良市(18.57)、⑤中和(西)(12.14)、⑥吉野(4.50)の順であった。また、同一保健所内での推移では、全ての保健所においてH26よりH27に減少を認めた。

月別報告数(定点当たり)-過去10年間の平均との比較(図11-4)は、最多の月が10年平均は7月(12.27)、H27も7月(10.79)であった。週別報告数(定点当たり)-過去10年間の平均との比較(図11-5)は、10年平均は最多の週が第28週(3.25)の一峰性の分布であったが、H27は最多が第29週(3.21)(109人)、次が第31週(2.65)(90人)の二峰性を示した。

年齢別報告数(実数)(図11-6)は、0歳が50人。1歳が173人で最多。次いで2歳が158人で、以下3歳(99人)から9歳(7人)まで、年齢が高くなると共に漸減傾向であった。また年齢階級別報告数は10-14歳(17人)、20-29歳(2人)であった。

なお、ウイルス検出状況は、ヘルパンギーナを疑う患者からの検体提出は少なく3例のみで、検出されたウイルスはヒトヘルペスウイルス7型、コクサッキーウイルスA6型、ライノウイルスが各1例であった。

(柳生 善彦 記)

12.流行性耳下腺炎

図 12-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

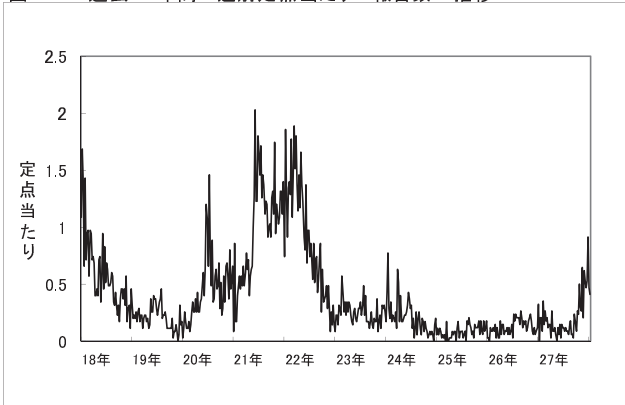


図 12-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

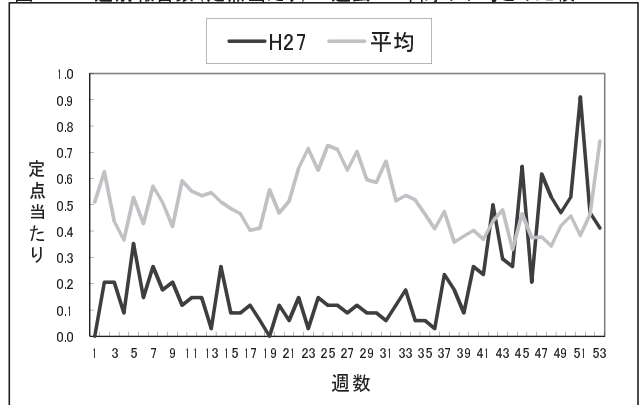


図 12-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

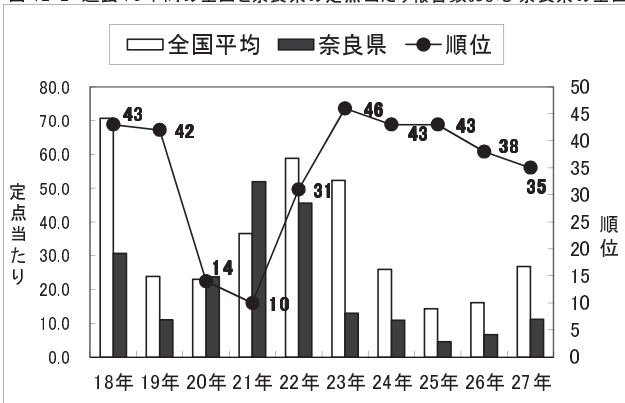


図 12-6 年齢別報告数(実数)

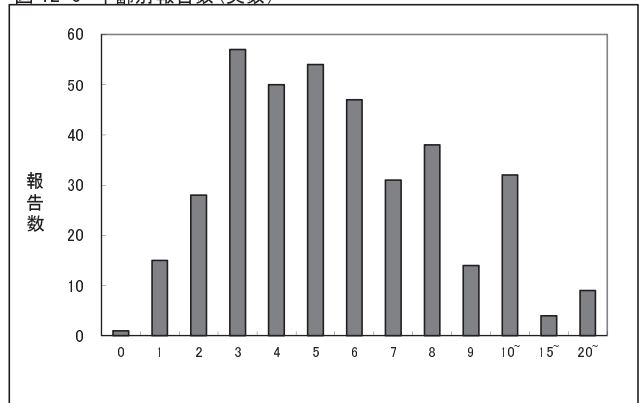


図 12-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

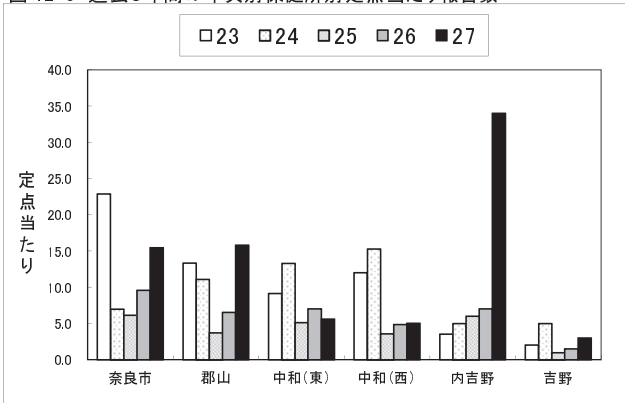
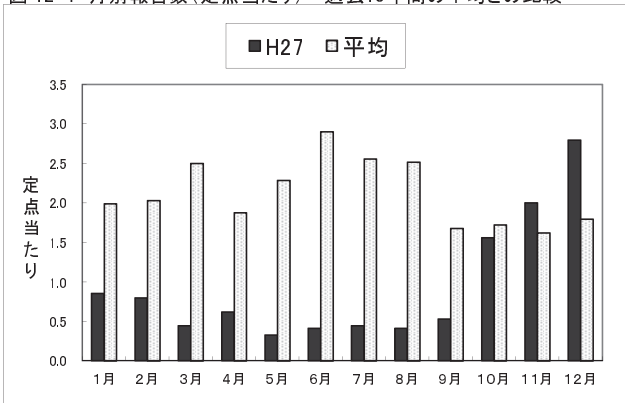


図 12-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



コメント

H27の奈良県の報告数は380人(定点当たり11.18)であった。

過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移(図12-1)は、H25-26と低水準であったが、H27は年末に向けて顕著な増加傾向を示し、第51週(0.91)(31人)が最多であった。

過去10年間の全国と奈良県の定点当たりの報告数および奈良県の全国順位(図12-2)は、H25と比較して、H26全国(16.05)、奈良県(6.62)(38位)に引き続き、H27全国(26.80)、奈良県(11.18)(35位)と、2年連続の増加となった。

過去5年間の年次別保健所別定点当たりの報告数(図12-3)は、H27は①内吉野(34.00)、②郡山(15.80)、③奈良市(15.43)、④中和(東)(5.57)、⑤中和(西)(5.00)、⑥吉野(3.00)の順であった。また、同一保健所内の推移では、中和(東)以外全ての保健所でH26よりH27に増加を認めたが、特に内吉野において顕著であった(=ここ5年間の全保健所の中で最多)。

月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較(図12-4)は、最多の月が10年平均は6月(2.90)、H27は12月(2.79)であった。

週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較(図12-5)は、最多の週が10年平均は第53週(0.74)、H27は第51週(0.91)(31人)であった。

年齢別報告数(実数)(図12-6)は、3歳(57人)が最多であった。0歳(1人)から3歳までは漸増、逆に、3歳から9歳(14人)までは漸減傾向(但し途中の5歳54人、8歳38人)であった。また、年齢階級別報告数は10-14歳(32人)、15-19歳(4人)、20-29歳(9人)であった。

(柳生 善彦 記)

眼科定点分

13.急性出血性結膜炎

図 13-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

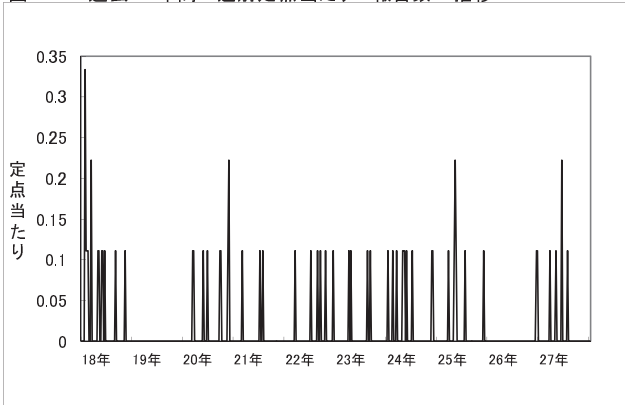


図 13-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

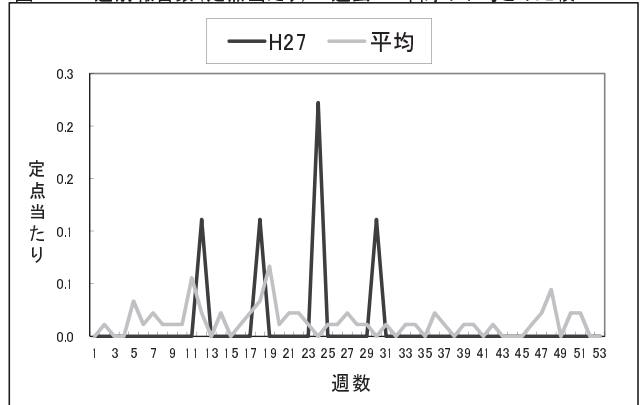


図 13-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

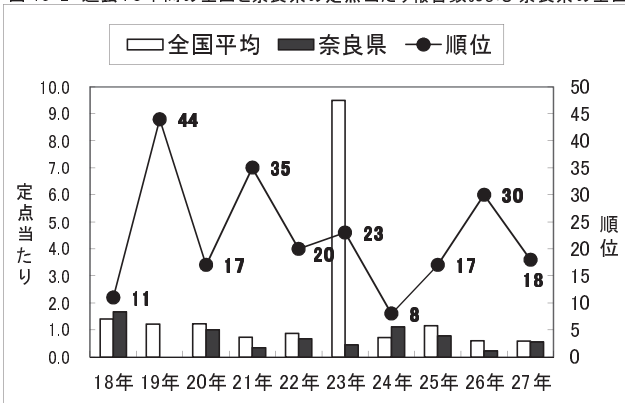


図 13-6 年齢別報告数(実数)

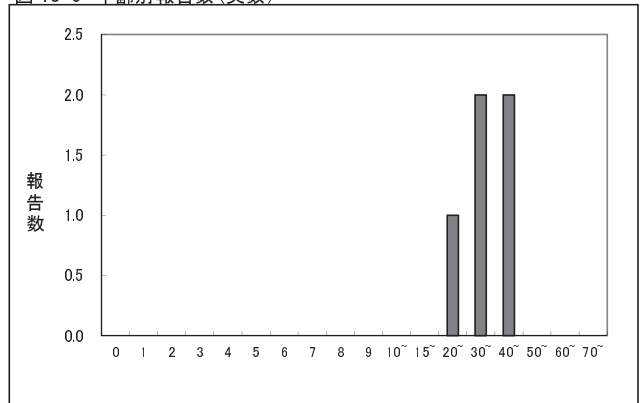
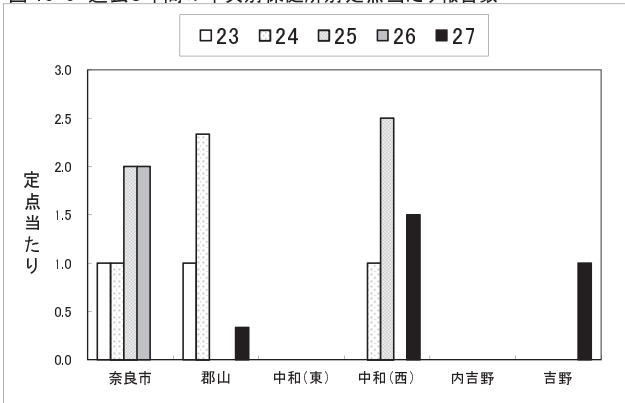


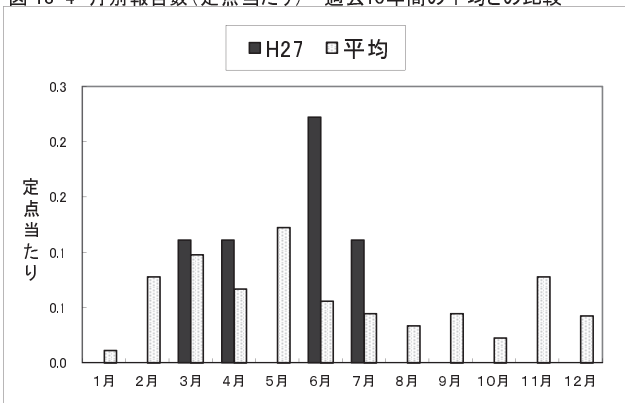
図 13-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数



コメント

県内定点全体では5例の報告があり、3月4月に各1例、6月に2例、7月に1例報告された。郡山と中和(西)で全例成人であった。全国順位は18位で定点あたりの報告数は全国平均とほぼ同じであった。
(平井 宏明 記)

図 13-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



14.流行性角結膜炎

図 14-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

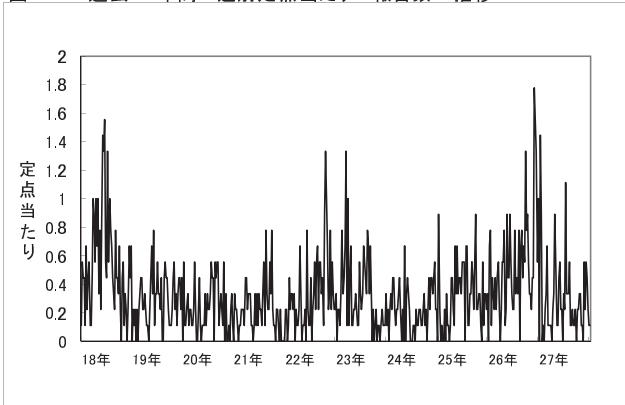


図 14-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

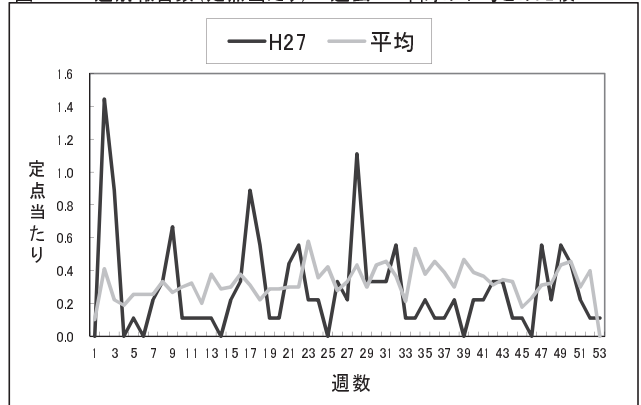


図 14-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

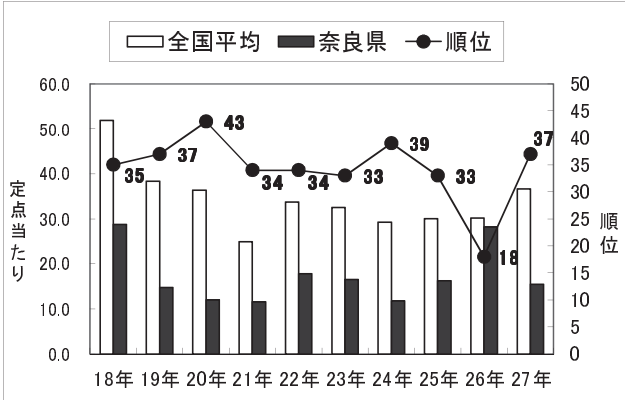


図 14-6 年齢別報告数(実数)

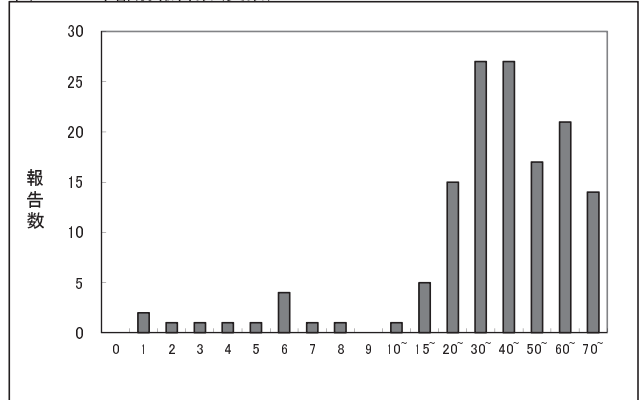


図 14-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

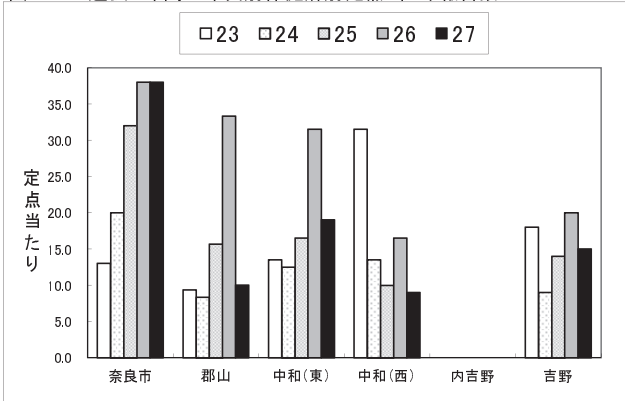
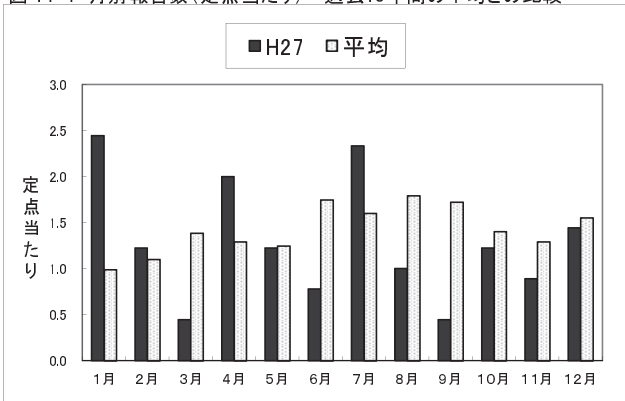


図 14-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



コメント

県内定点全体では139例の報告があった。多発した前年と異なり、一転して減少し、全国と比較しても、全国平均の約4割にとどまった。順位も37位となりほぼ例年通りの傾向に戻った。時期的には1,4,7月に多く見られた。定点あたりでは奈良市が多く、中和(東)、吉野がつづき、逆に郡山、中和(西)は奈良市の3割弱の報告であった。年齢的には20歳未満は13%にとどまり、成人の報告が大部分を占めた。30歳40歳をピークにこの年代で全体の約4割を占めた。次いで60歳50歳に多く見られた。

(平井 宏明 記)

基幹定点分(週報)

15.細菌性髄膜炎

図 15-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

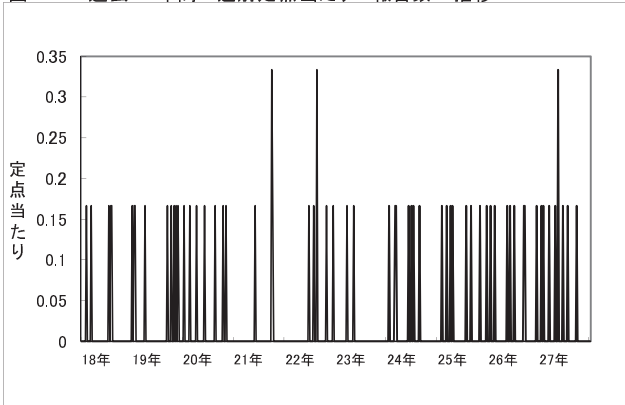


図 15-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

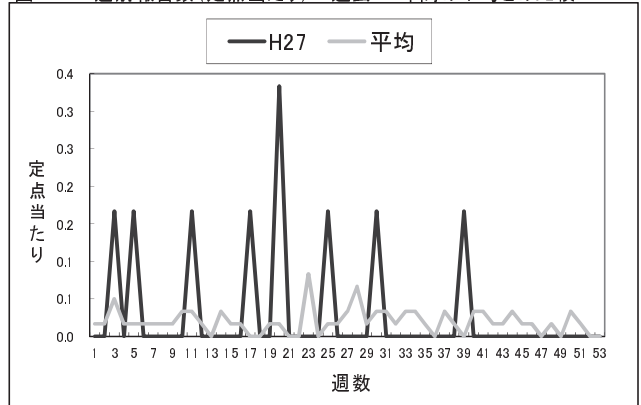


図 15-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

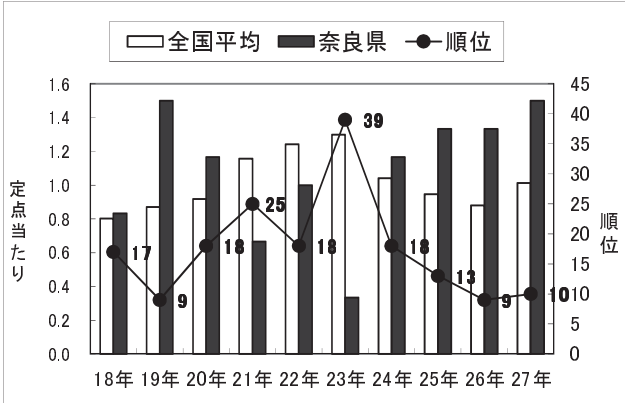


図 15-6 年齢別報告数(実数)

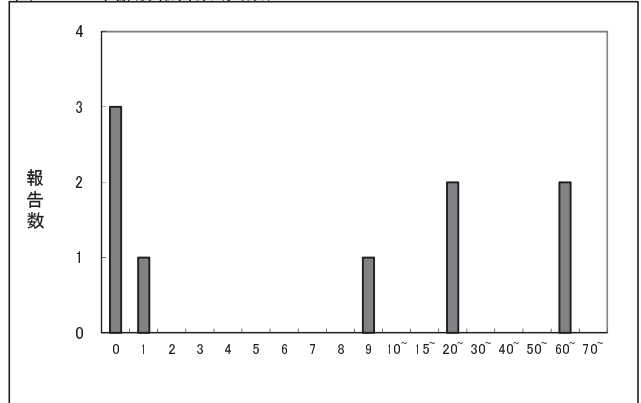


図 15-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

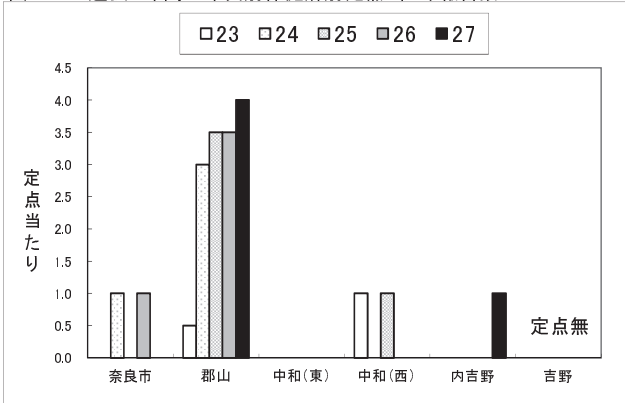
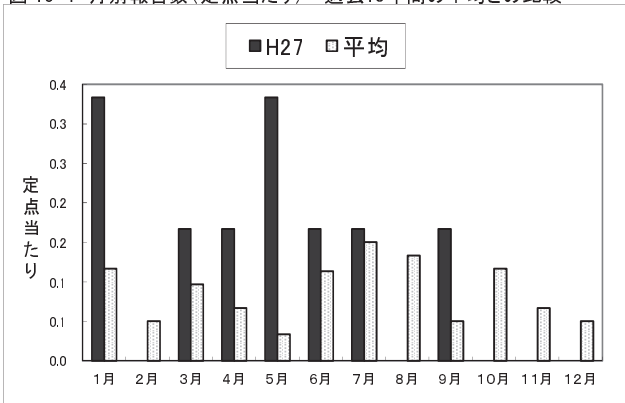


図 15-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



コメント

平成27年の全報告数は9例で、定点あたりの報告数は1.5であり、昨年とほぼ同様の推移を示した。Hibワクチン、肺炎球菌ワクチンの普及により全国的に細菌性髄膜炎は減少していることが報告されているが、奈良県の総数に大きな変化はなく全国順位も高いままである。奈良県からの報告数の絶対値が小さいため傾向をつかむことは困難であるが、奈良県においてはさらに総数を減少させる余地がまだあるものと推察される。

(矢野 寿一 記)

16.無菌性髄膜炎

図 16-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

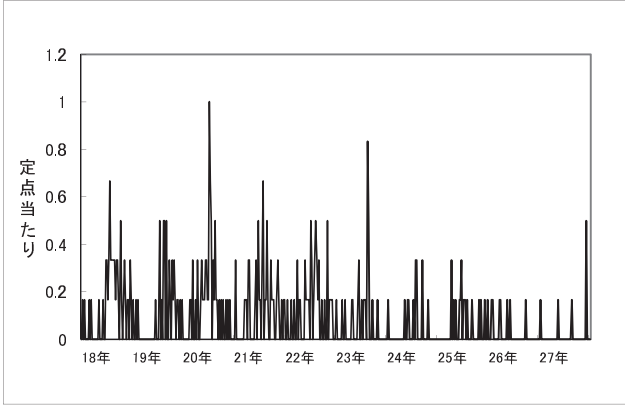


図 16-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

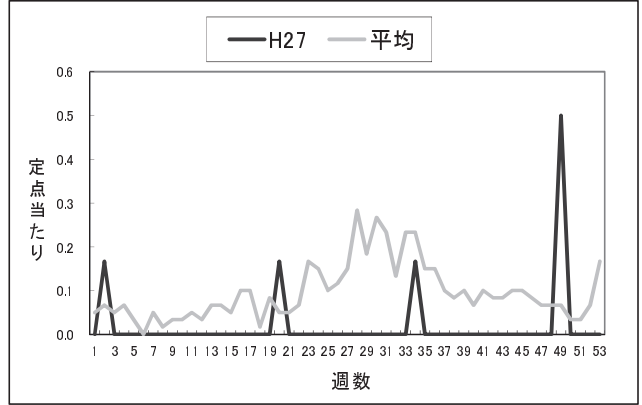


図 16-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

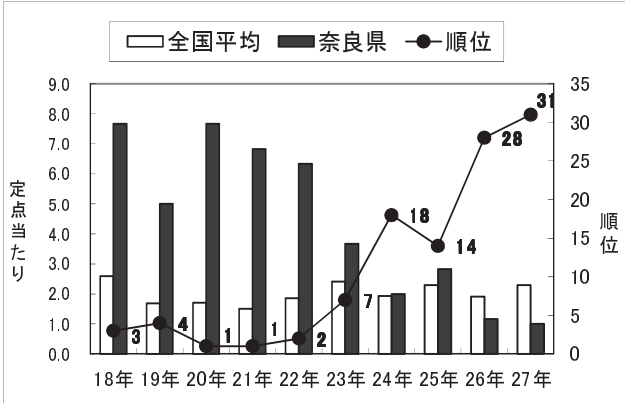


図 16-6 年齢別報告数(実数)

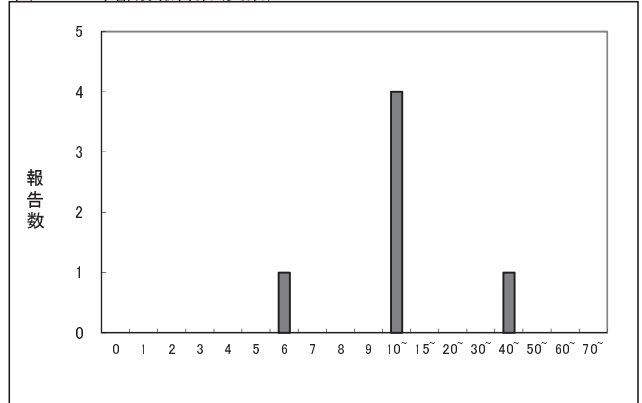


図 16-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

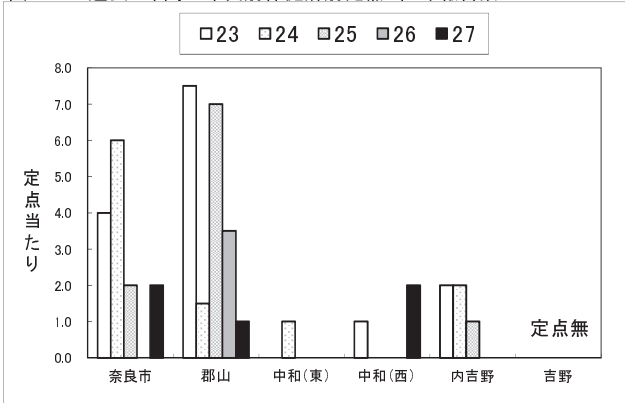
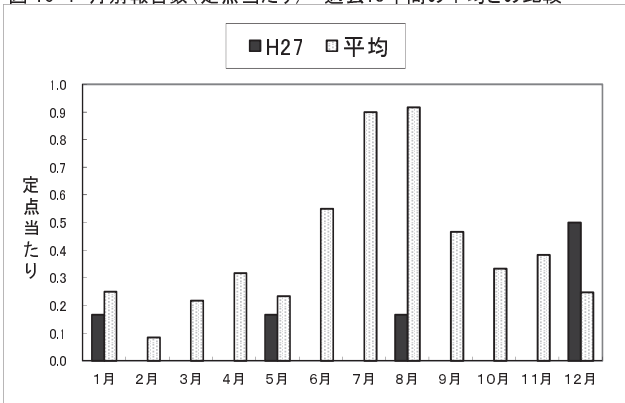


図 16-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



コメント

平成27年の全報告数は6例、定点あたりの報告数は1.0で、平成23年からの改善傾向が持続している。例年、奈良県は無菌性髄膜炎が全国平均と比較し高く、順位も一桁台であったが、大きく減少傾向にある。今回のデータでは明言はできないが、奈良県は全国と比較して、無菌性髄膜炎が少なく細菌性髄膜炎が多いということは、奈良県における細菌性髄膜炎の病原菌診断精度の高さを反映しているのかもしれない。

(矢野 寿一 記)

17.マイコプラズマ肺炎

図 17-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

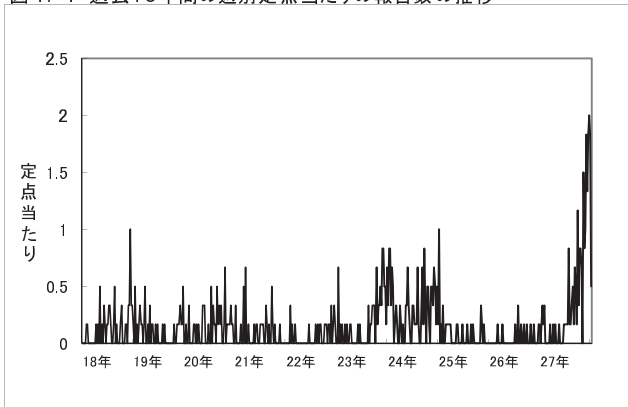


図 17-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

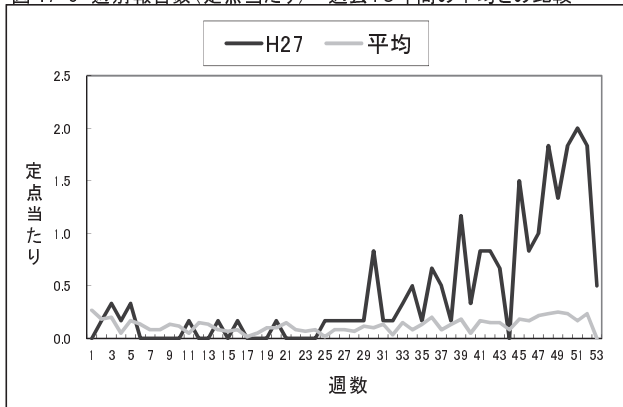


図 17-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

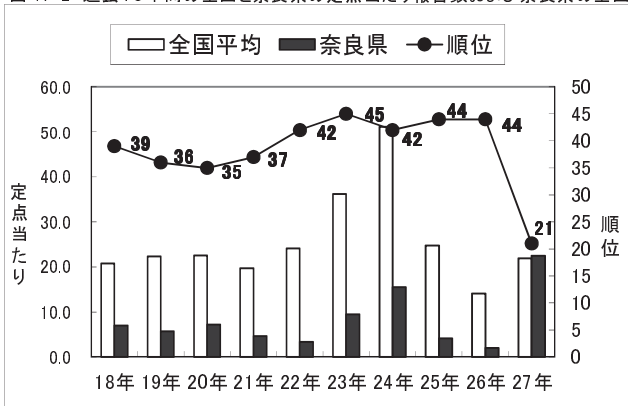


図 17-6 年齢別報告数(実数)

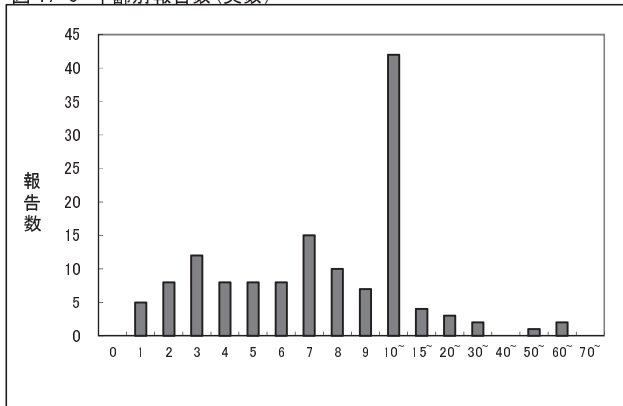


図 17-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

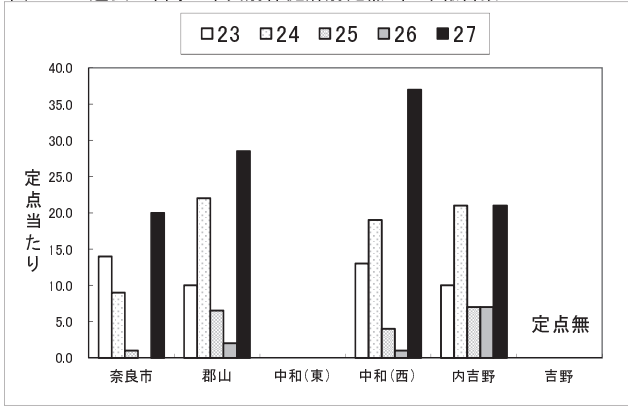
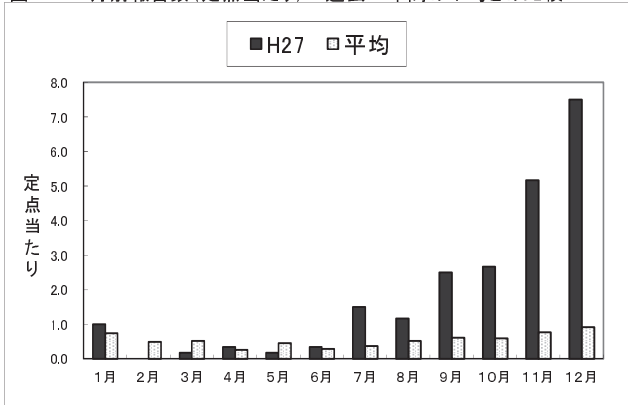


図 17-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



コメント

平成27年における全報告数は135例、定点あたりの報告数は22.5で、平成25年、26年と比較し、大きく増加している。全国順位も44位から21位へと大きく下げた。しかし、28年はマイコプラズマが全国的に大きな流行の兆しを見せており、奈良県ではこれが早期にみられた可能性が示唆される。マクロライド耐性マイコプラズマという治療上の問題点もあり、28年の動向を注視する必要がある。

(矢野 寿一 記)

18.クラミジア肺炎

図 18-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

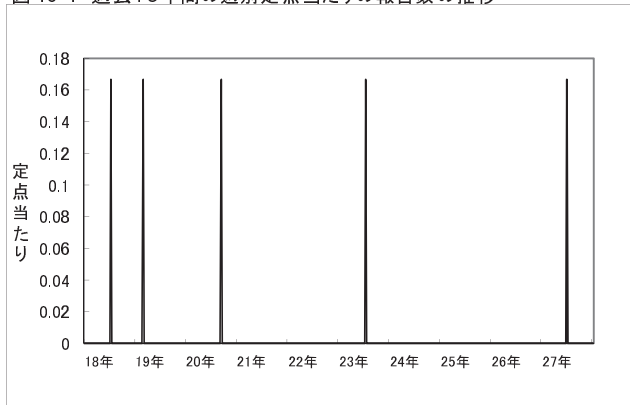


図 18-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

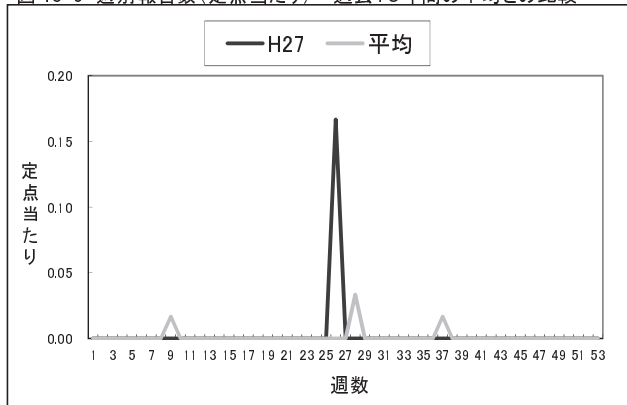


図 18-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

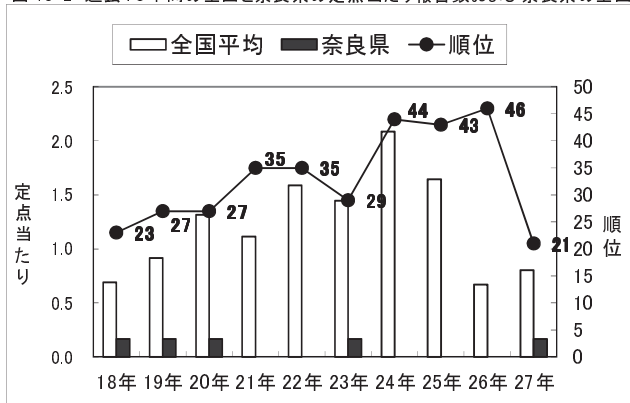


図 18-6 年齢別報告数(実数)

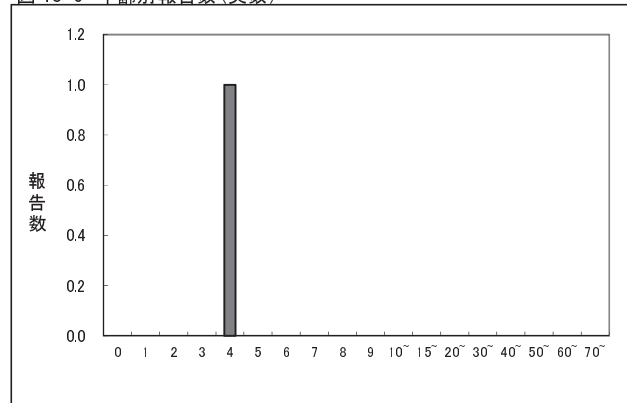
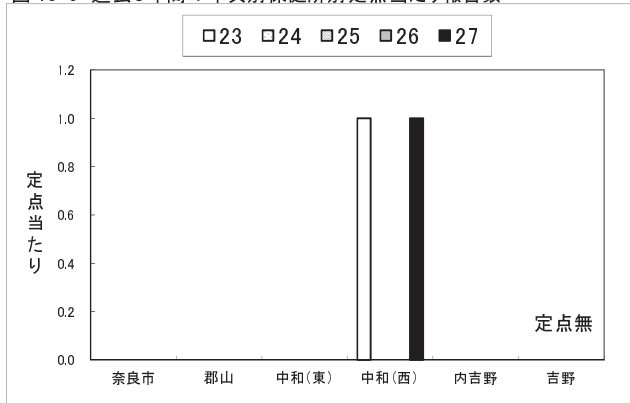


図 18-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

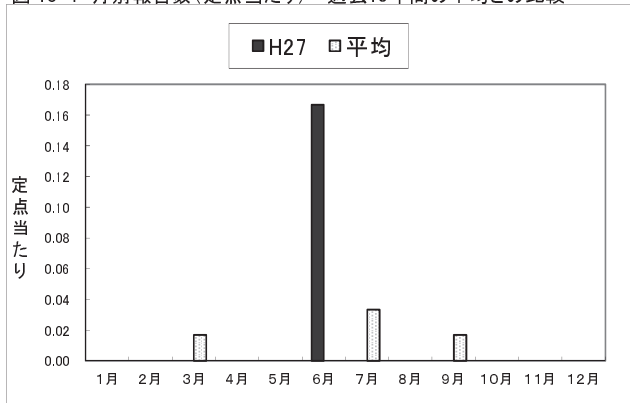


コメント

平成24～26年は クラミジア肺炎の報告はみられなかったが、27年は1例の報告があった。しかし、低値で推移していることに変わりはないようである。

(矢野 寿一 記)

図 18-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



19. 感染性胃腸炎(ロタウイルス)

図 19-1 過去10年間の週別定点当たりの報告数の推移

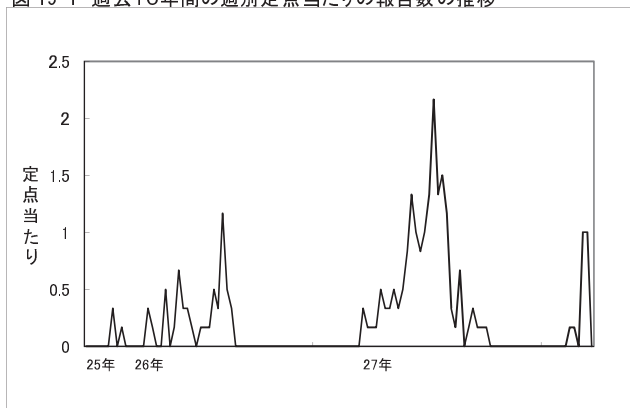


図 19-5 週別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

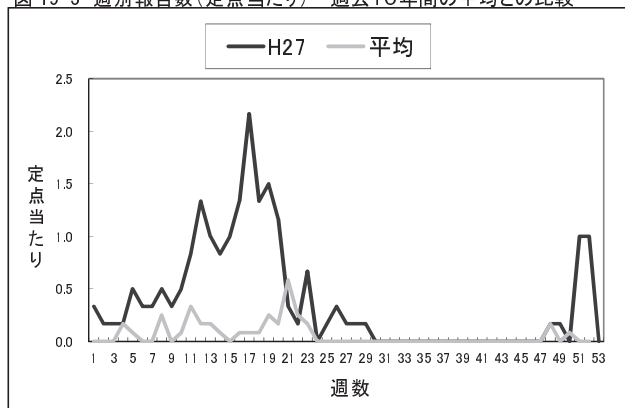


図 19-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数および奈良県の全国順位

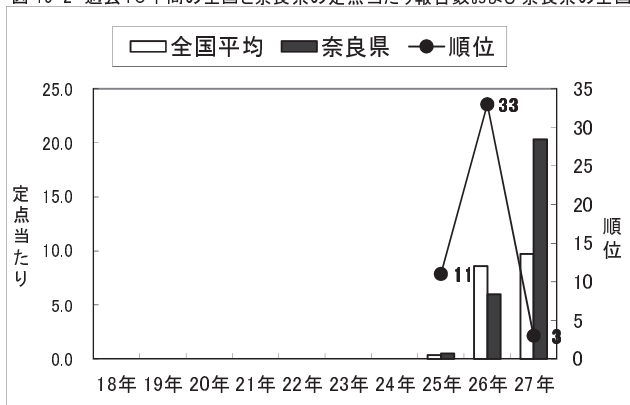


図 19-6 年齢別報告数(実数)

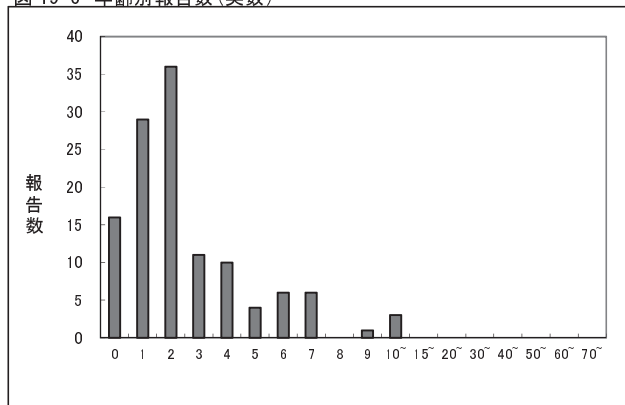


図 19-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

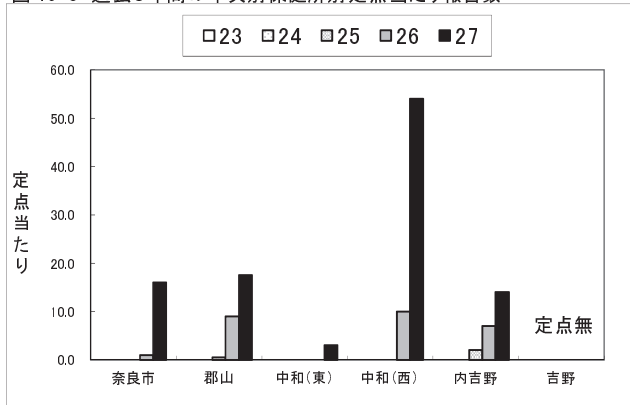
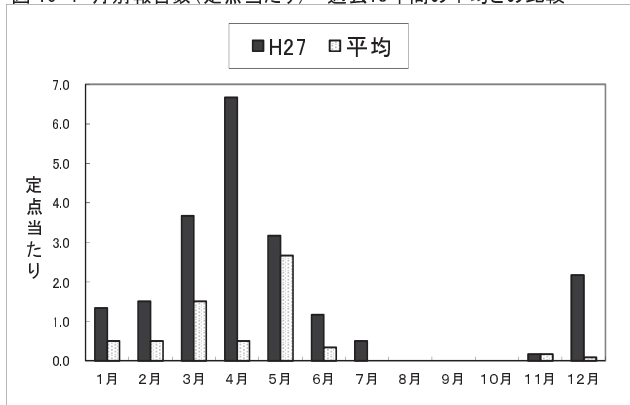


図 19-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



コメント

平成27年における全報告数は122件で、定点あたりの報告数は20.3であった。25年は全国順位11位であったが前年は33位へと改善し、27年は再び3位へと大きく下げている。ロタウイルスは感染力が強く、伝播流行しやすいため、たまたま流行を拾っただけの数値である可能性はある。

すでにロタワクチンが接種可能となっており、本調査のみでは奈良県における接種状況は明らかではないが、接種率のさらなる上昇が望まれる。任意接種ということもあり、行政的な対応も必要であろう。

(矢野 寿一 記)

性感染症(STD)定点分

20.性器クラミジア感染症

図 20-1 過去10年間の月別定点当たりの報告数の推移

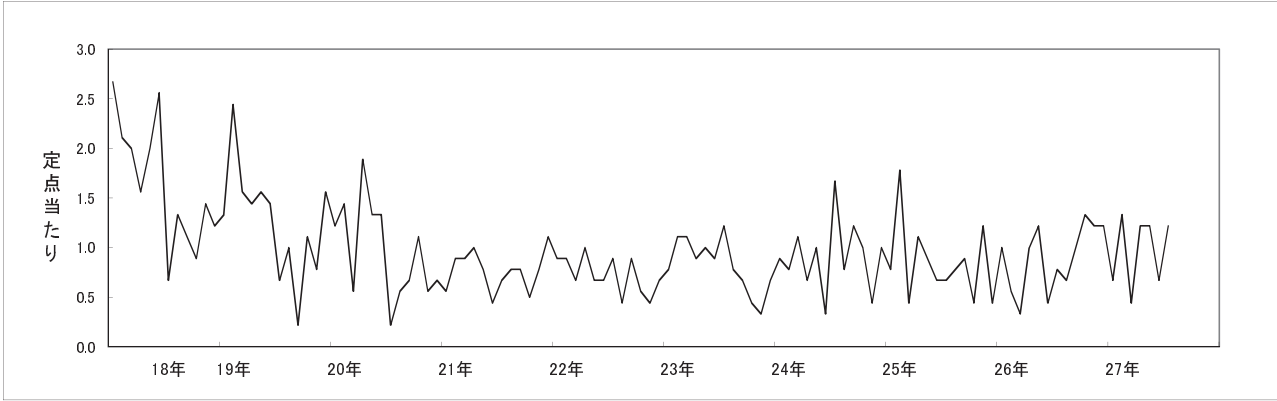


図 20-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数

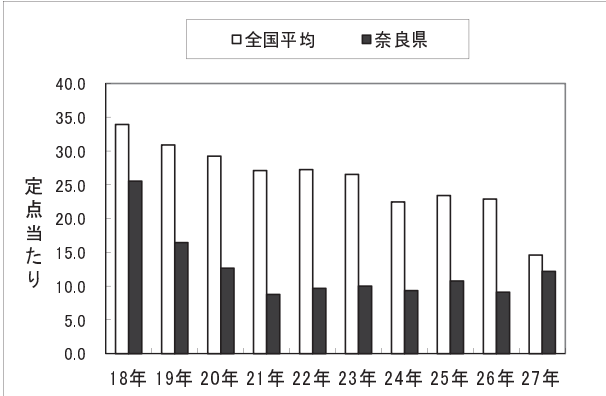


図 20-5 年齢別報告数(実数)

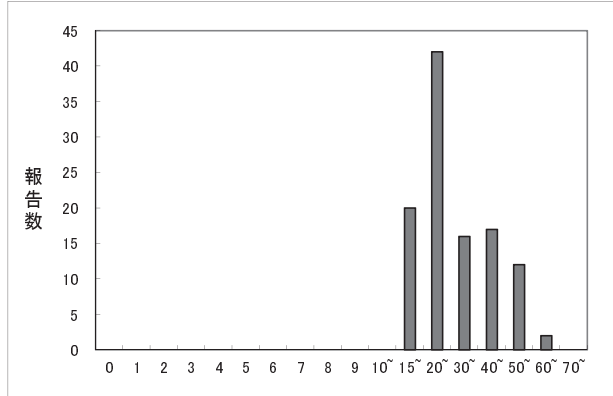
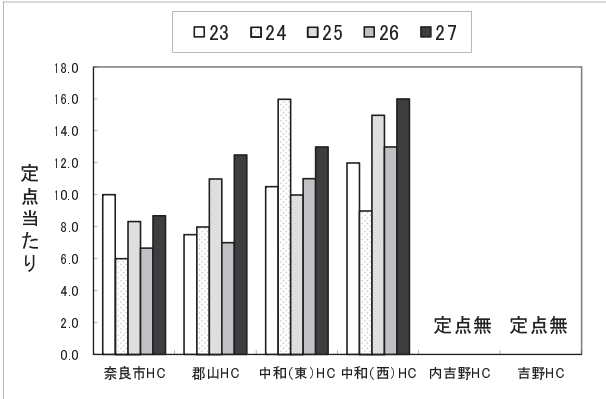


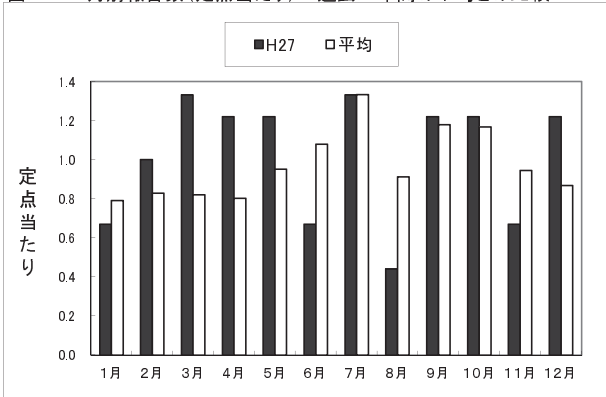
図 20-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数



コメント

例年通り、STD4疾患では最多患者数を示した。定点あたりの報告数はやや増加したが、全国平均が平成27年度は急激に減少したため差がなくなった。保健所地区別4定点でいずれの定点においても増加し、年齢別では15歳～60歳まで幅広く観察されているが、20歳代が最多で次いで20歳以下であるが、20歳以下の報告数は減少し、26年に認められた15歳以下の報告はなかった。一方で、40～50歳代が増加した。月別報告数は、夏場に減少が認められた。
(三馬 省二 記)

図 20-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



21.性器ヘルペスウイルス感染症

図 21-1 過去10年間の月別定点当たりの報告数の推移

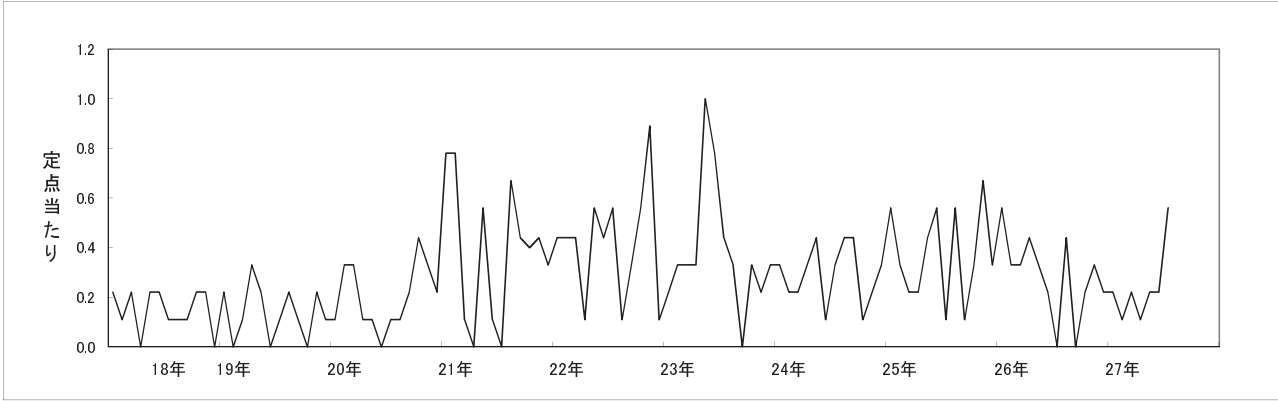


図 21-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数

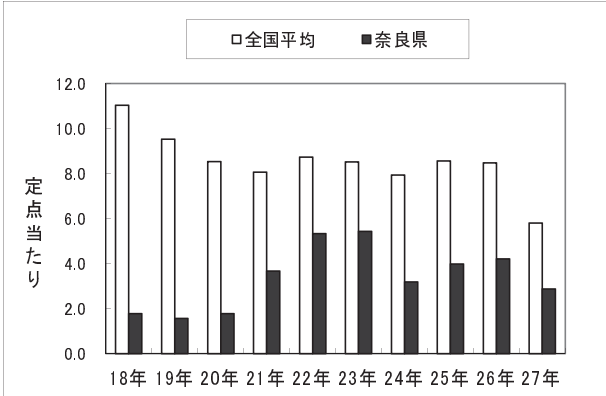


図 21-5 年齢別報告数(実数)

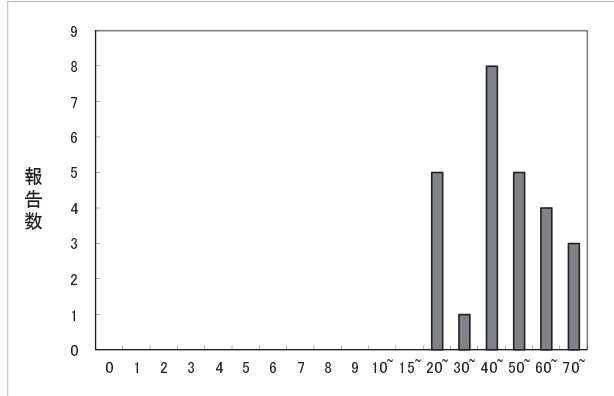
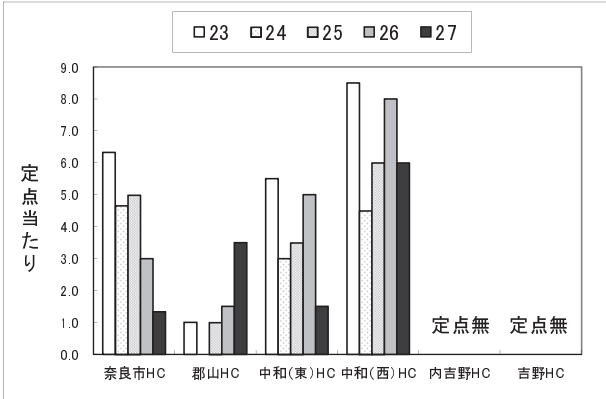


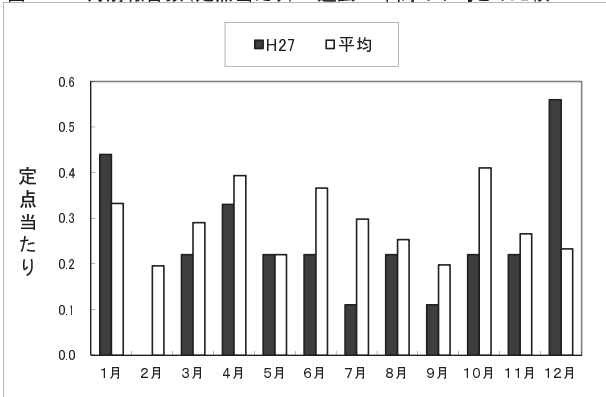
図 21-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数



コメント

報告数はSTD4疾患では尖圭コンジローマに抜かれ第4位となった。定点あたりの報告数はやや減少したが、全国平均が平成27年度は急激に減少した結果的に差が小さくなった。保健所地区別では郡山のみ増加しているが、残る3定点では減少した。年齢別では20歳～70歳まで幅広く観察されているが、40歳代が最多で次いで30歳代が減少した。27年では20歳以下の報告数はなかった。月別報告数は、夏場の増加が認められた一方で、12月・1月の増加が顕著であった。
(三馬 省二 記)

図 21-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



22.尖圭コンジローマ

図 22-1 過去10年間の月別定点当たりの報告数の推移

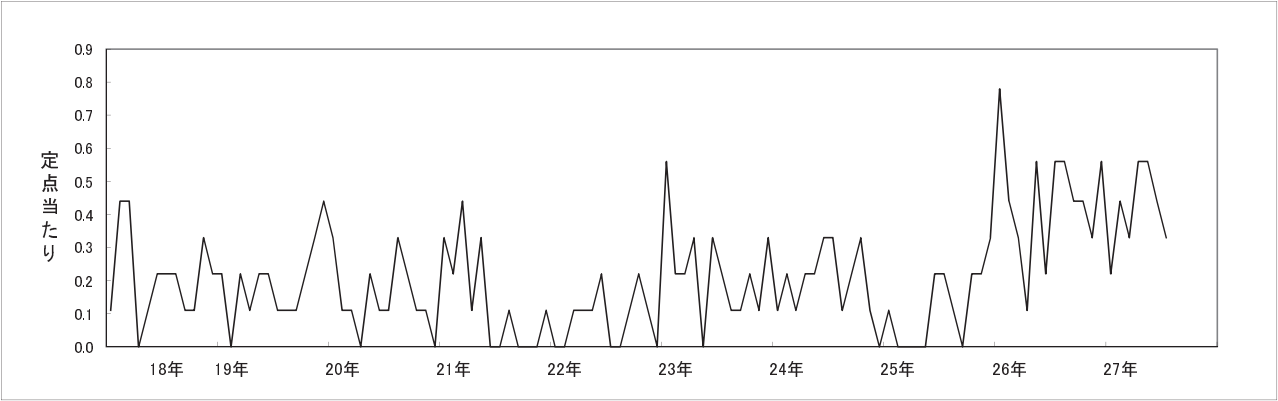


図 22-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数

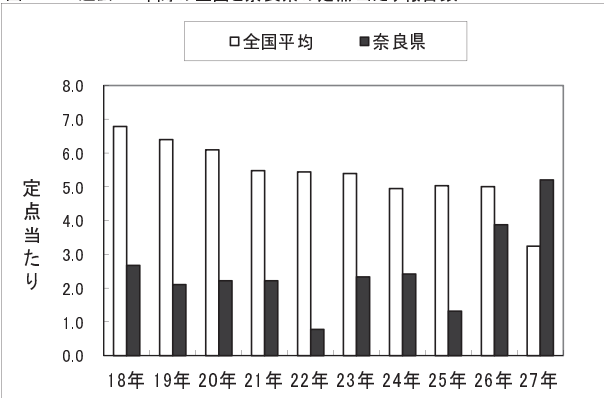


図 22-5 年齢別報告数(実数)

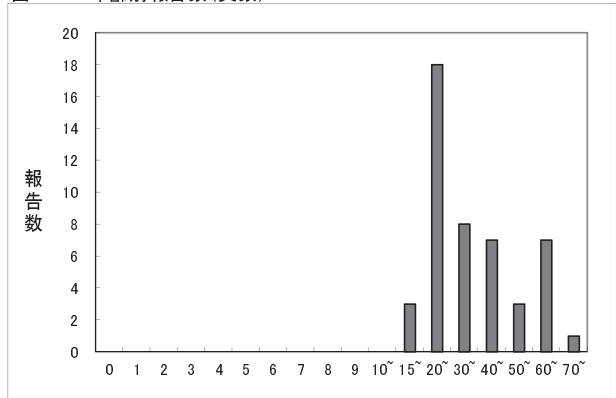
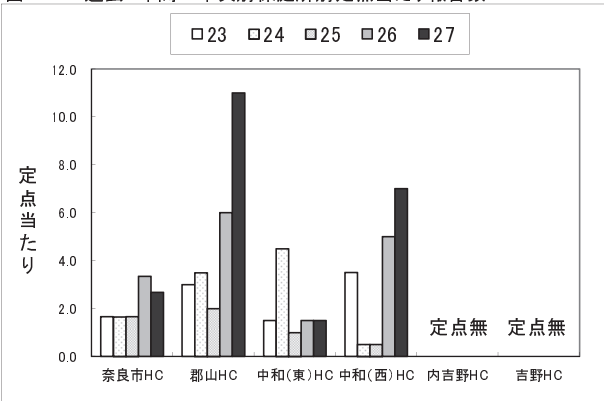


図 22-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

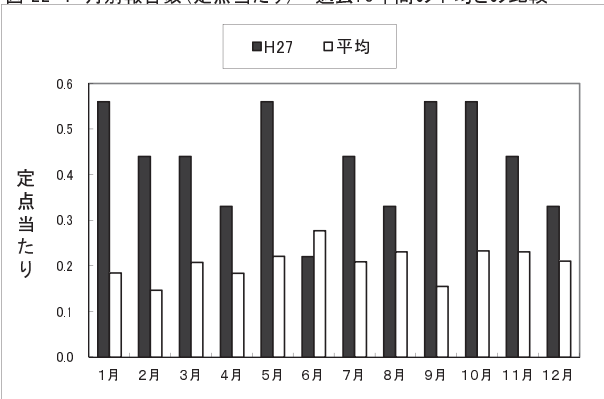


コメント

報告数はSTD4疾患では性器ヘルペスを抜いて第3位となった。定点あたりの報告数は平成25年度より増加しているが、全国平均が平成27年度は減少したため全国平均を上回った。保健所地区別では、郡山地区の増加が著明であった。年齢別では15歳～60歳まで幅広く観察されているが、20歳代が最多で次いで20歳以下であるが、20歳以下の報告数は減少した一方で、60歳以上の増加が目される。月別報告数は、相対的に夏場に減少が認められたが、6月を除いて1年を通して増加傾向である。

(三馬 省二 記)

図 22-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



23.淋菌感染症

図 23-1 過去10年間の月別定点当たりの報告数の推移

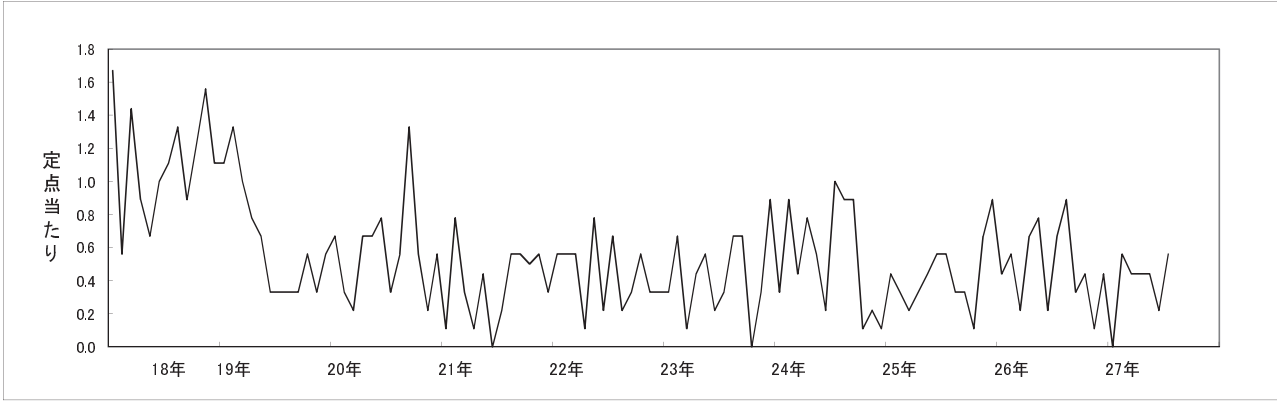


図 23-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数

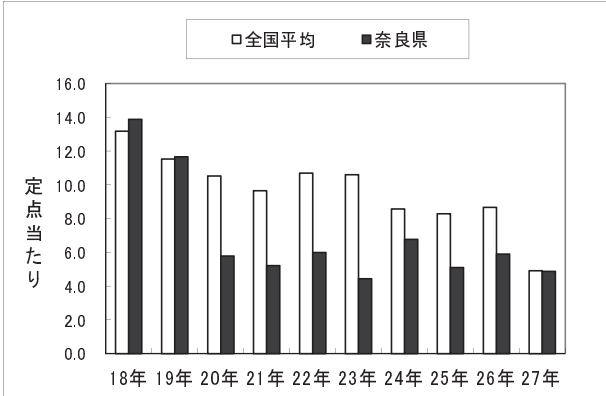


図 23-5 年齢別報告数(実数)

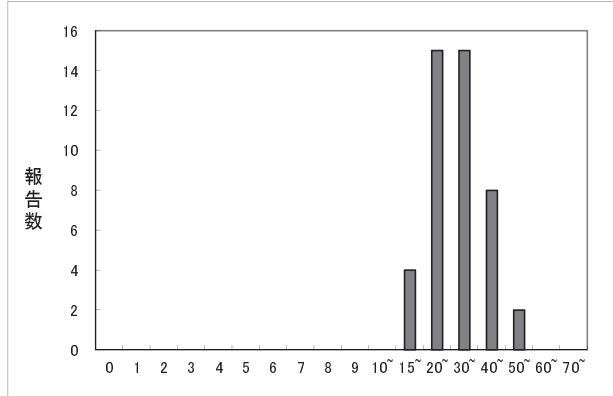
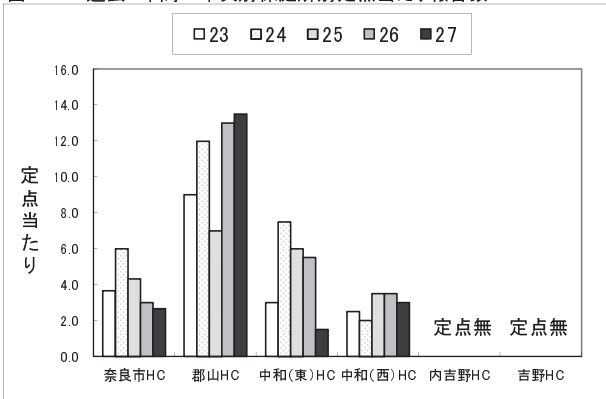


図 23-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

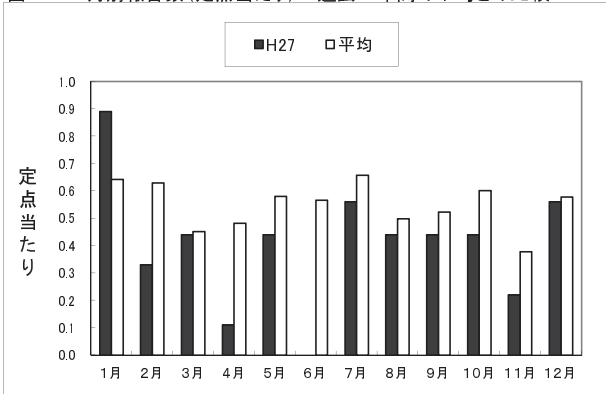


コメント

報告数がやや減少し、尖圭コンジローマと並んだ。全国平均が平成27年度は急激に減少したため差がなくなった。保健所別定点では、郡山地区が微増した以外は減少した。年齢別では20歳～30歳代が最多であるが、26年に最多であった20歳以下の報告数は減少した一方で、50～60歳代が増加した。月別報告数は、季節変動は著明でなかった。

(三馬 省二 記)

図 23-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



基幹定点分(月報)

24.メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

図 24-1 過去10年間の月別定点当たりの報告数の推移

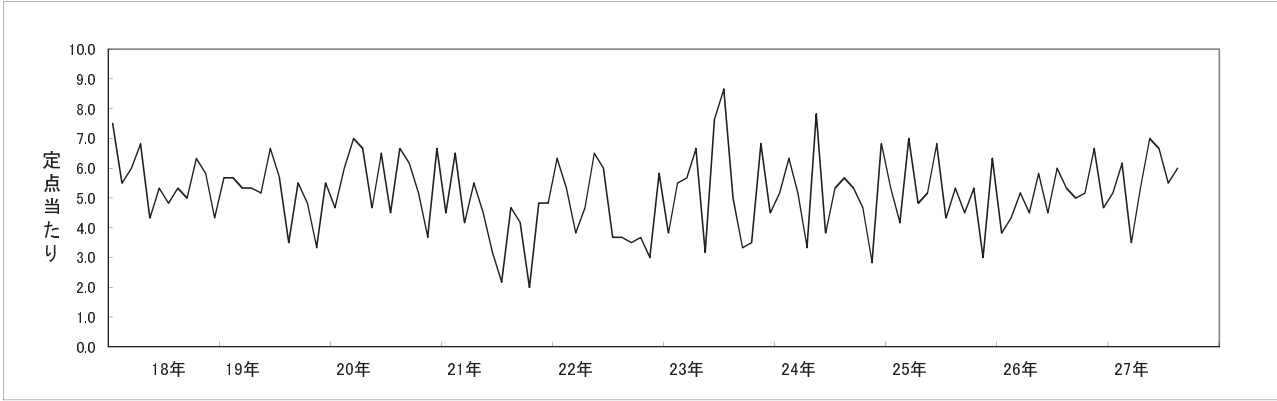


図 24-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数

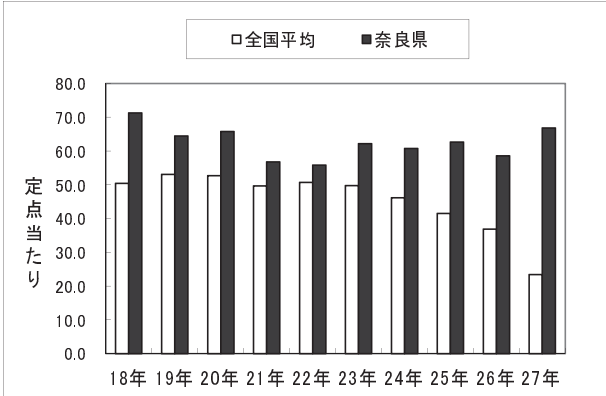


図 24-5 年齢別報告数(実数)

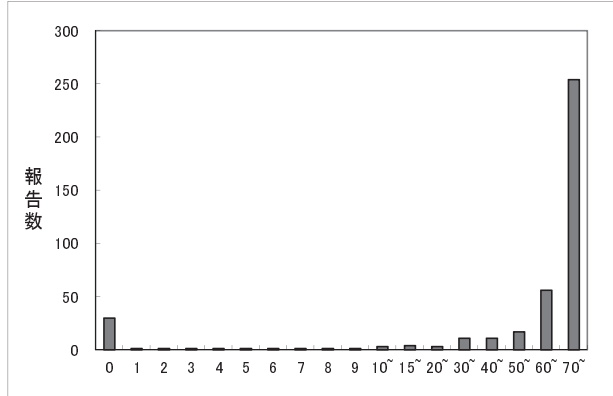
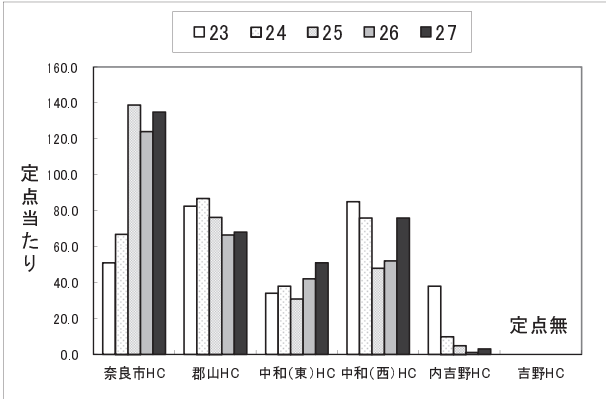


図 24-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数



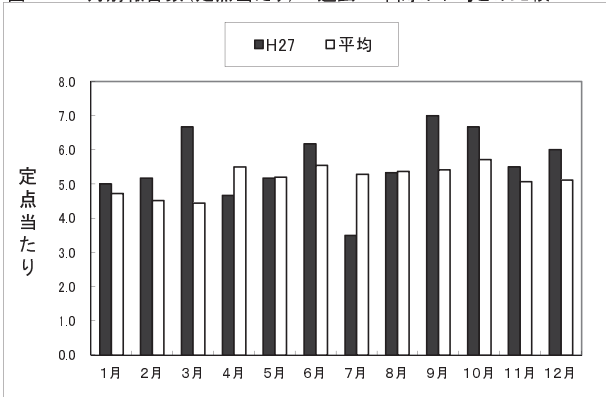
コメント

平成27年における報告数は401例で、定点あたりの報告数は66.83と例年と比べ増加し、全国順位も2位と例年よりやや悪くなっている。全国的にはMRSA分離率は減少傾向にあるが、奈良県ではまだその傾向はみられていないようである。医療関連感染対策のさらなる徹底が望まれる。

また、奈良県のある地方では、MRSAの中でも病原性が高い市中感染型MRSAの伝播拡散が報告されており、これは米国で猛威をふるっている株と同一のタイプであることが確認されている。今後、奈良県における市中感染型MRSAの動向も注意する必要がある。

(矢野 寿一 記)

図 24-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



25.ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

図 25-1 過去10年間の月別定点当たりの報告数の推移

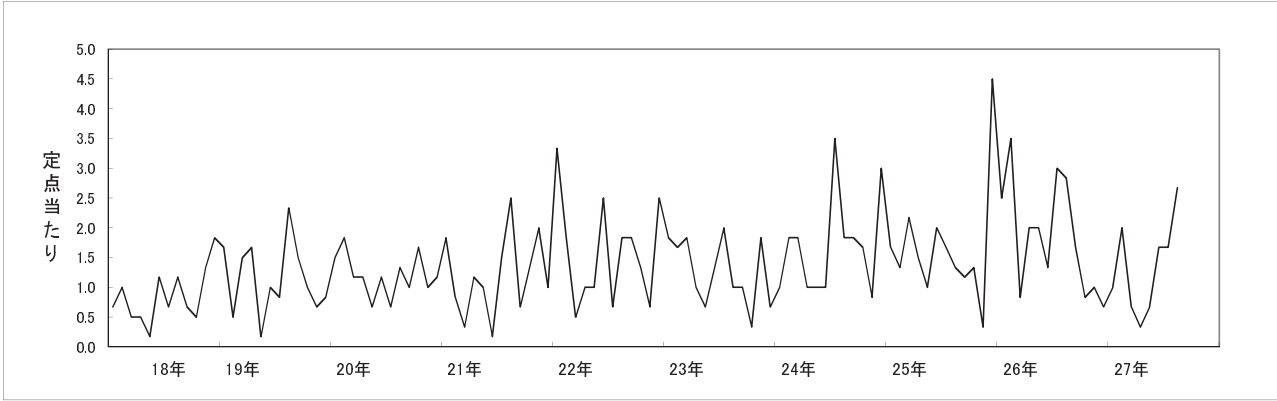


図 25-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数

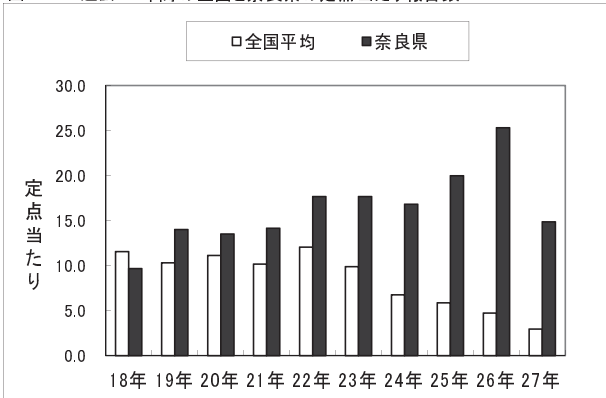


図 25-5 年齢別報告数(実数)

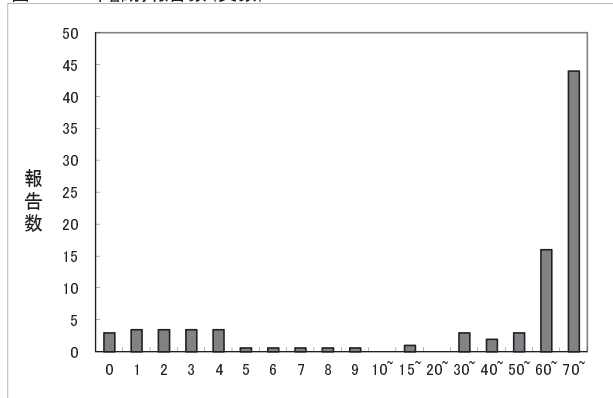
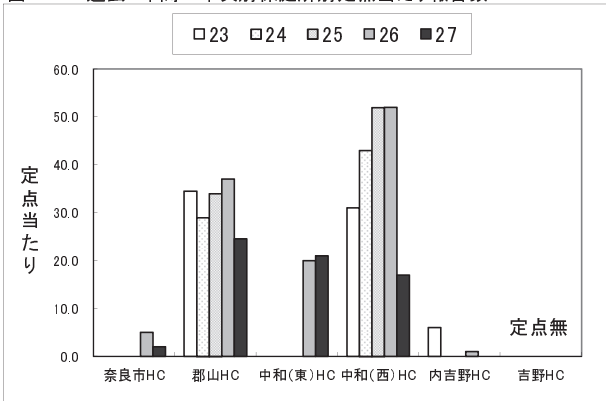


図 25-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数

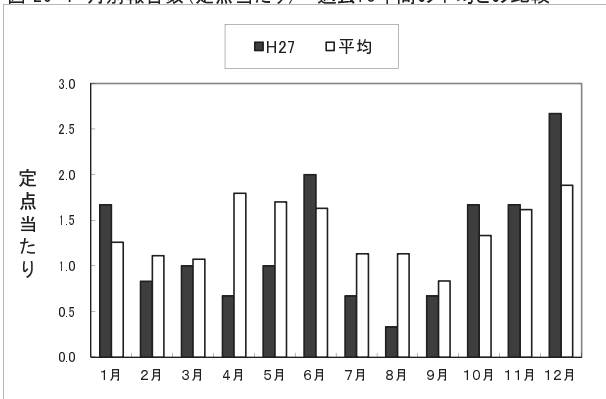


コメント

平成26年における報告数は89例、定点あたりの報告数は14.83であった。全国的には肺炎球菌の分離率は低下し、さらにペニシリン耐性肺炎球菌、侵襲性肺炎球菌感染症の激減が報告されているが、これは2010年の7価結合型肺炎球菌ワクチンの任意接種、2013年4月に定期接種化、2013年11月に13価結合型肺炎球菌ワクチンへ切り替えにより、小児のみならず、高齢者にも好影響を与えたためと考えられている。一方奈良県は、26年まで報告数が増加していたが、27年に入り減少に転じてきている。遅ればせながらも全国と同様の傾向を示しはじめたが、まだ全国ワースト2位である。奈良県におけるワクチン接種率は定かでないが、全国と比べてそれが低いことが示唆され、奈良県においてもワクチン接種率の増加を期待したい。

(矢野 寿一 記)

図 25-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較



26.薬剤耐性緑膿菌感染症

図 26-1 過去10年間の月別定点当たりの報告数の推移

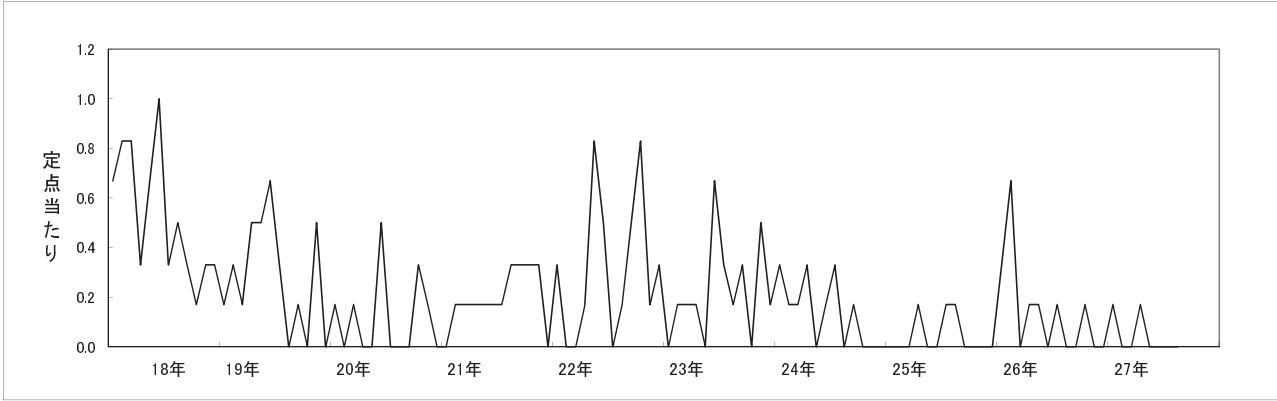


図 26-2 過去10年間の全国と奈良県の定点当たり報告数

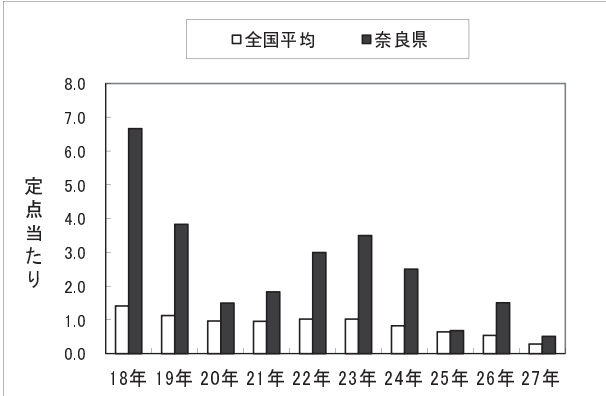


図 26-5 年齢別報告数(実数)

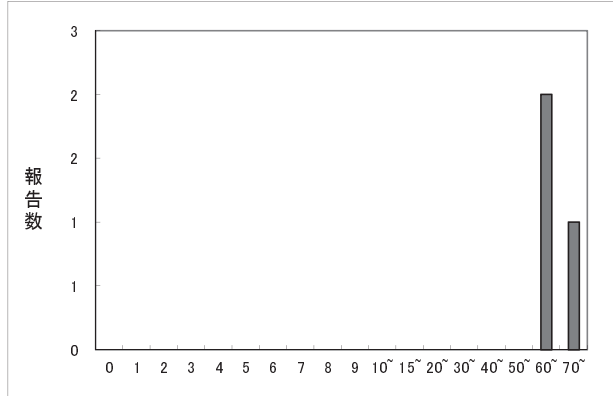
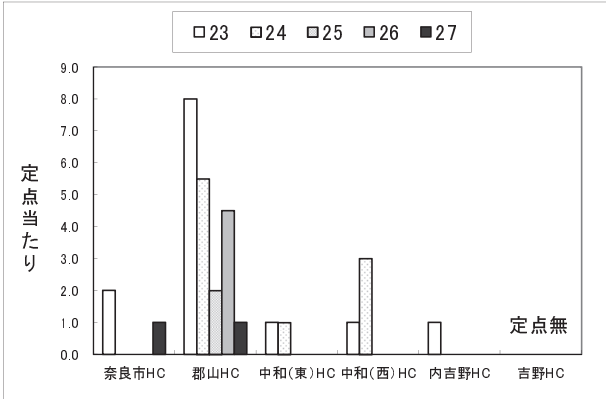


図 26-3 過去5年間の年次別保健所別定点当たり報告数



コメント

平成27年の全報告数は3例で、定点あたりの報告数は0.50であった。奈良県においても全国的にも報告数は減少傾向にある。多剤耐性緑膿菌の分離数は報告数よりかなり多いことから、保菌であって感染症でないケースが多いことが想定される。

近年西日本を中心に流行しているカルバペネム耐性腸内細菌科細菌は、カルバペネムに対する耐性が低く薬剤感受性検査ではカルバペネマーゼ産生菌と判明できず、それと認識できない間に医療施設で拡散してしまう事例が多数報告されている。一方、多剤耐性緑膿菌は耐性度は高いものの感受性検査で認識しやすく、医療関連感染防止策をとりやすいことも報告数の低さに関連しているものと考えられる。

(矢野 寿一 記)

図 26-4 月別報告数(定点当たり)ー過去10年間の平均との比較

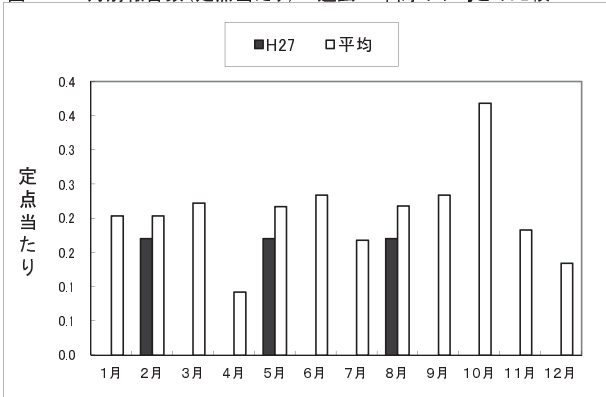


表1 疾患別・月別報告数

報告実数

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
インフルエンザ	5,451	1,333	697	431	47	1	1	5	8	9	21	76	8,080
RSウイルス感染症	194	88	60	30	10	8	10	18	102	222	387	686	1,815
咽頭結膜熱	34	28	27	52	65	87	36	50	56	65	68	90	658
A群溶連菌咽頭炎	165	158	274	308	389	401	205	92	100	171	214	309	2,786
感染症胃腸炎	675	729	824	908	651	507	370	216	252	492	852	1,305	7,781
水痘	70	69	33	69	42	27	29	8	29	30	56	57	519
手足口病	46	66	116	237	298	644	2,156	499	136	35	24	17	4,274
伝染性紅斑	11	24	19	25	27	51	68	37	36	55	60	116	529
突発性発しん	44	57	55	66	44	83	84	67	62	84	73	56	775
百日咳	1	0	0	3	0	0	2	0	3	2	0	0	11
ヘルパンギーナ	1	0	1	3	14	59	367	174	37	17	9	3	685
流行性耳下腺炎	29	27	15	21	11	14	15	14	18	53	68	95	380
計	1,270	1,246	1,424	1,722	1,551	1,881	3,342	1,175	831	1,226	1,811	2,734	20,213
急性出血性結膜炎	0	0	1	1	0	2	1	0	0	0	0	0	5
流行性角結膜炎	22	11	4	18	11	7	21	9	4	11	8	13	139
計	22	11	5	19	11	9	22	9	4	11	8	13	144
細菌性髄膜炎	2	0	1	1	2	1	1	0	1	0	0	0	9
無菌性髄膜炎	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	3	6
マイコプラズマ肺炎	6	0	1	2	1	2	9	7	15	16	31	45	135
クラミジア肺炎	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
感染性胃腸炎(ロタウイルス)	8	9	22	40	19	7	3	0	0	0	1	13	122
計	17	9	24	43	23	11	13	8	16	16	32	61	273
性器クラミジア感染症	6	9	12	11	11	6	12	4	11	11	6	11	110
性器ヘルペスウイルス感染症	4	0	2	3	2	2	1	2	1	2	2	5	26
尖圭コンジローマ	5	4	4	3	5	2	4	3	5	5	4	3	47
淋菌感染症	8	3	4	1	4	0	5	4	4	4	2	5	44
計	23	16	22	18	22	10	22	13	21	22	14	24	227
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	30	31	40	28	31	37	21	32	42	40	33	36	401
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	10	5	6	4	6	12	4	2	4	10	10	16	89
薬剤耐性緑膿菌感染症	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	3
計	40	37	46	32	38	49	25	35	46	50	43	52	493

定点当たり報告数

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
インフルエンザ	100.94	24.69	12.91	7.98	0.87	0.02	0.02	0.09	0.15	0.17	0.39	1.41	149.63
RSウイルス感染症	5.71	2.59	1.76	0.88	0.29	0.24	0.29	0.53	3.00	6.53	11.38	20.18	53.38
咽頭結膜熱	1.00	0.82	0.79	1.53	1.91	2.56	1.06	1.47	1.65	1.91	2.00	2.65	19.35
A群溶連菌咽頭炎	4.85	4.65	8.06	9.06	11.44	11.79	6.03	2.71	2.94	5.03	6.29	9.09	81.94
感染症胃腸炎	19.85	21.44	24.24	26.71	19.15	14.91	10.88	6.35	7.41	14.47	25.06	38.38	228.85
水痘	2.06	2.03	0.97	2.03	1.24	0.79	0.85	0.24	0.85	0.88	1.65	1.68	15.26
手足口病	1.35	1.94	3.41	6.97	8.76	18.94	63.41	14.68	4.00	1.03	0.71	0.50	125.71
伝染性紅斑	0.32	0.71	0.56	0.74	0.79	1.50	2.00	1.09	1.06	1.62	1.76	3.41	15.56
突発性発しん	1.29	1.68	1.62	1.94	1.29	2.44	2.47	1.97	1.82	2.47	2.15	1.65	22.79
百日咳	0.03	0.00	0.00	0.09	0.00	0.00	0.06	0.00	0.09	0.06	0.00	0.00	0.32
ヘルパンギーナ	0.03	0.00	0.03	0.09	0.41	1.74	10.79	5.12	1.09	0.50	0.26	0.09	20.15
流行性耳下腺炎	0.85	0.79	0.44	0.62	0.32	0.41	0.44	0.41	0.53	1.56	2.00	2.79	11.18
計	37.35	36.65	41.88	50.65	45.62	55.32	98.29	34.56	24.44	36.06	53.26	80.41	594.50
急性出血性結膜炎	0.00	0.00	0.11	0.11	0.00	0.22	0.11	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.56
流行性角結膜炎	2.44	1.22	0.44	2.00	1.22	0.78	2.33	1.00	0.44	1.22	0.89	1.44	15.44
計	2.44	1.22	0.56	2.11	1.22	1.00	2.44	1.00	0.44	1.22	0.89	1.44	16.00
細菌性髄膜炎	0.33	0.00	0.17	0.17	0.33	0.17	0.17	0.00	0.17	0.00	0.00	0.00	1.50
無菌性髄膜炎	0.17	0.00	0.00	0.00	0.17	0.00	0.00	0.17	0.00	0.00	0.00	0.50	1.00
マイコプラズマ肺炎	1.00	0.00	0.17	0.33	0.17	0.33	1.50	1.17	2.50	2.67	5.17	7.50	22.50
クラミジア肺炎	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.17	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.17
感染性胃腸炎(ロタウイルス)	1.33	1.50	3.67	6.67	3.17	1.17	0.50	0.00	0.00	0.00	0.17	2.17	20.33
計	2.83	1.50	4.00	7.17	3.83	1.83	2.17	1.33	2.67	2.67	5.33	10.17	45.50
性器クラミジア感染症	0.67	1.00	1.33	1.22	1.22	0.67	1.33	0.44	1.22	1.22	0.67	1.22	12.22
性器ヘルペスウイルス感染症	0.44	0.00	0.22	0.33	0.22	0.22	0.11	0.22	0.11	0.22	0.22	0.56	2.89
尖圭コンジローマ	0.56	0.44	0.44	0.33	0.56	0.22	0.44	0.33	0.56	0.56	0.44	0.33	5.22
淋菌感染症	0.89	0.33	0.44	0.11	0.44	0.00	0.56	0.44	0.44	0.44	0.22	0.56	4.89
計	2.56	1.78	2.44	2.00	2.44	1.11	2.44	1.44	2.33	2.44	1.56	2.67	25.22
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	5.00	5.17	6.67	4.67	5.17	6.17	3.50	5.33	7.00	6.67	5.50	6.00	66.83
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	1.67	0.83	1.00	0.67	1.00	2.00	0.67	0.33	0.67	1.67	1.67	2.67	14.83
薬剤耐性緑膿菌感染症	0.00	0.17	0.00	0.00	0.17	0.00	0.00	0.17	0.00	0.00	0.00	0.00	0.50
計	6.67	6.17	7.67	5.33	6.33	8.17	4.17	5.83	7.67	8.33	7.17	8.67	82.17

表3 疾患別・保健所別報告数

報告実数

	奈良市	郡山	中和(東)	中和(西)	内吉野	吉野	北部	中部	南部	奈良県
インフルエンザ	1,664	2,129	1,438	2,230	299	320	3,793	3,668	619	8,080
RSウイルス感染症	385	286	490	545	14	95	671	1,035	109	1,815
咽頭結膜熱	76	197	92	249	2	42	273	341	44	658
A群溶連菌咽頭炎	585	1,049	323	631	13	185	1,634	954	198	2,786
感染症胃腸炎	1,328	2,238	1,723	2,055	163	274	3,566	3,778	437	7,781
水痘	124	269	47	58	10	11	393	105	21	519
手足口病	976	1,256	1,151	682	56	153	2,232	1,833	209	4,274
伝染性紅斑	159	196	79	82	4	9	355	161	13	529
突発性発しん	299	172	185	78	32	9	471	263	41	775
百日咳	5	4	0	1	0	1	9	1	1	11
ヘルパンギーナ	130	246	188	85	27	9	376	273	36	685
流行性耳下腺炎	108	158	39	35	34	6	266	74	40	380
計	4,175	6,071	4,317	4,501	355	794	10,246	8,818	1,149	20,213
急性出血性結膜炎	0	1	0	3	0	1	1	3	1	5
流行性角結膜炎	38	30	38	18	0	15	68	56	15	139
計	38	31	38	21	0	16	69	59	16	144
細菌性髄膜炎	0	8	0	0	1	0	8	0	1	9
無菌性髄膜炎	2	2	0	2	0	0	4	2	0	6
マイコプラズマ肺炎	20	57	0	37	21	0	77	37	21	135
クラミジア肺炎	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1
感染性胃腸炎(ロタウイルス)	16	35	3	54	14	0	51	57	14	122
計	38	102	3	94	36	0	140	97	36	273
性器クラミジア感染症	26	26	26	32	0	0	52	58	0	110
性器ヘルペスウイルス感染症	4	7	3	12	0	0	11	15	0	26
尖圭コンジローマ	8	22	3	14	0	0	30	17	0	47
淋菌感染症	8	27	3	6	0	0	35	9	0	44
計	46	82	35	64	0	0	128	99	0	227
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	135	136	51	76	3	0	271	127	3	401
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	2	49	21	17	0	0	51	38	0	89
薬剤耐性緑膿菌感染症	1	2	0	0	0	0	3	0	0	3
計	138	187	72	93	3	0	325	165	3	493

定点当たり報告数

	奈良市	郡山	中和(東)	中和(西)	内吉野	吉野	北部	中部	南部	奈良県
インフルエンザ	151.27	133.06	130.73	202.73	149.50	106.67	140.48	166.73	123.80	149.63
RSウイルス感染症	55.00	28.60	70.00	77.86	14.00	47.50	39.47	73.93	36.33	53.38
咽頭結膜熱	10.86	19.70	13.14	35.57	2.00	21.00	16.06	24.36	14.67	19.35
A群溶連菌咽頭炎	83.57	104.90	46.14	90.14	13.00	92.50	96.12	68.14	66.00	81.94
感染症胃腸炎	189.71	223.80	246.14	293.57	163.00	137.00	209.76	269.86	145.67	228.85
水痘	17.71	26.90	6.71	8.29	10.00	5.50	23.12	7.50	7.00	15.26
手足口病	139.43	125.60	164.43	97.43	56.00	76.50	131.29	130.93	69.67	125.71
伝染性紅斑	22.71	19.60	11.29	11.71	4.00	4.50	20.88	11.50	4.33	15.56
突発性発しん	42.71	17.20	26.43	11.14	32.00	4.50	27.71	18.79	13.67	22.79
百日咳	0.71	0.40	0.00	0.14	0.00	0.50	0.53	0.07	0.33	0.32
ヘルパンギーナ	18.57	24.60	26.86	12.14	27.00	4.50	22.12	19.50	12.00	20.15
流行性耳下腺炎	15.43	15.80	5.57	5.00	34.00	3.00	15.65	5.29	13.33	11.18
計	596.43	607.10	616.71	643.00	355.00	397.00	602.71	629.86	383.00	594.50
急性出血性結膜炎	0.00	0.33	0.00	1.50	0.00	1.00	0.25	0.75	1.00	0.56
流行性角結膜炎	38.00	10.00	19.00	9.00	0.00	15.00	17.00	14.00	15.00	15.44
計	38.00	10.33	19.00	10.50	0.00	16.00	17.25	14.75	16.00	16.00
細菌性髄膜炎	0.00	4.00	0.00	0.00	1.00	0.00	2.67	0.00	1.00	1.50
無菌性髄膜炎	2.00	1.00	0.00	2.00	0.00	0.00	1.33	1.00	0.00	1.00
マイコプラズマ肺炎	20.00	28.50	0.00	37.00	21.00	0.00	25.67	18.50	21.00	22.50
クラミジア肺炎	0.00	0.00	0.00	1.00	0.00	0.00	0.00	0.50	0.00	0.17
感染性胃腸炎(ロタウイルス)	16.00	17.50	3.00	54.00	14.00	0.00	17.00	28.50	14.00	20.33
計	38.00	51.00	3.00	94.00	36.00	0.00	46.67	48.50	36.00	45.50
性器クラミジア感染症	8.67	13.00	13.00	16.00	0.00	0.00	10.40	14.50	0.00	12.22
性器ヘルペスウイルス感染症	1.33	3.50	1.50	6.00	0.00	0.00	2.20	3.75	0.00	2.89
尖圭コンジローマ	2.67	11.00	1.50	7.00	0.00	0.00	6.00	4.25	0.00	5.22
淋菌感染症	2.67	13.50	1.50	3.00	0.00	0.00	7.00	2.25	0.00	4.89
計	15.33	41.00	17.50	32.00	0.00	0.00	25.60	24.75	0.00	25.22
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	135.00	68.00	51.00	76.00	3.00	0.00	90.33	63.50	3.00	66.83
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	2.00	24.50	21.00	17.00	0.00	0.00	17.00	19.00	0.00	14.83
薬剤耐性緑膿菌感染症	1.00	1.00	0.00	0.00	0.00	0.00	1.00	0.00	0.00	0.50
計	138.00	93.50	72.00	93.00	3.00	0.00	108.33	82.50	3.00	82.17